

班別調査活動より

・大人になれた日	荒井理恵	1
・調査活動	伊藤友二	2
・調査活動を行って	石垣圭久	2
・3つの教え	岡智彦	3
・交通の面からみた阪神大震災	木村正	3
・神戸で学んだこと	杉森一幸	4
・楽しいこう	竹下雄大	4
・ハプニング	谷口智也	5
・調査活動	藤堂伸勝	5
・調査活動	西辻一真	6
・最高の体験	廣沢享之	6
・震災の傷	山田和俊	7
・阪神大震災のかくれた姿	朝日智子	7
・修学旅行じゃない修学旅行	尾関愛子	8
・オシャレな街	桜井麻里子	8
・気さくな神生さんとその仲間たち	寺澤千尋	9
・立ち直った神戸	藤尾春佳	10
・二日目の調査活動より	古橋里衣子	10
・新しい発見	桜井優広	11
・震災	土田悠貴	11
・いい経験調査活動	佐々木英雄	12
・調査活動で学んだこと	文村卓矢	12
・調査活動で学ぶこと	安田一晴	13
・震災について	笠場一由	13
・地震は心を傷つける	杉川智哉	14
・グリコ……そして	西直人	15
・調査活動で感じたこと	清水佳芳里	15
・不安に満ちた調査活動	高橋絢子	16
・彫刻の街神戸	船谷明子	17

• 神戸から学ぶ				
～調査活動を終えて～	野崎優貴	17		
• 表現の力	毛利公美	18		
• 本当のボランティア	大武陽一	19		
• 知識が増えた	大月伯恭	19		
• 明石	木津裕人	20		
• ビルの立ち並ぶ中の小さな公園で	志田知優	20		
• 調査活動のできごと	富田洋平	21		
• 長田区の天使	茂原健夫	21		
• 入れなかった	吉田昌平	22		
• 調査活動	五十嵐理紗	22		
• 調査活動を終えて	梅澤佳乃子	23		
• 鷹取商店街	大石香織	23		
• おばあちゃんとの出会い	田中沙季	24		
• 埋め立て地と神戸	藤木淋代	24		
• 向上心の行方	中村文美	25		
• 布引ハーブ園	藤田麻奈美	26		





大人になれた日

A組 荒井理恵

「飛翔 ～明日の私達と神戸へ～」

私達2年生の修学旅行はこのテーマから始まった。私にとってこの修学旅行は、どの活動をとってみても学びの多い、思い出深いものとなった。特に調査活動たるものはテーマと深く結びつく活動ができたと思う。

私が当初、考えていた調査活動——それは「適当に済ませよう」だった。特に興味を持つテーマでもなく、単なる一活動としか考えていなかった自分が恥ずかしい。

当初、私達はまず阪神電鉄本社へと向かった。そこで見たものは、それは、私が今まで経験したことがない位、丁寧な応対だった。私の予想をはるかに越えた、その応対には感動せずにはいられなかった。私達は30分も早く着いてしまったのだが、そのまま会議室に通されるとお二人の方が既に資料などを用意して待っていて下さった。あいさつを済ませ、席につき、様々な質問にお答え頂いた。中には、失礼にあたるものもあったと思うが、私達ができるだけ深く理解できるように……と幾つもの資料を活用して頂き、その行為には、何度御礼を言っても足りないほどだった。

その他、阪急鉄道や交通局、博物館と四つもの場所でお話をお聞きしたのだが、ある所は、「まだ疑問点があったら電話で聞いて下さいね」と優しい言葉を掛けて頂き、またある所ではわざわざタクシーを呼んで頂き、その後の予定にまで気を配って頂いたり……と嬉しい限りだった。

私がこの調査活動を通して得られたもの——それは「自分も社会の一員だ」という自覚である。出会うことのできた全ての方々から大人と同様の扱いを受けたことによってその気持ちが強くなった。今まで、自分にとってよくない状況・立場に置かれると「まだ14歳、子供だもん」という逃げに走っていた自分、幼い考え・心を持った自分が少しでも変われたかもしれない……という期待や希望がわいてきた。

「自分の言動や行動に責任を持つ」

これが、私の新たなテーマとなった。

また、この活動を通して人々の仕事に対しての自信や熱意が伝わってきたように思う。自分の仕事、自分の会社に誇りを持って働いている姿というのは、はたから見ても気持ちがいいし、尊敬できる。それは、私達も同じだと思う。自分の部活、委員会、クラス、学校に誇りを持たなければつまらない生活になってしまう。

そして、何より驚いたのが、自分の住んでいる町に誇りを持っていたことだ。誰もが神戸を愛し、大阪を愛していた。今の私には、福井を愛する気持ちというものが欠けていたように思う。

福井県人一人一人が福井を愛する心を持つことができれば、もっともっと住みよい福井になれると思う。その為には、「福井はファッション・文化が遅れている」とか「交通マナーが悪い」という固定観念を全て捨てて、新しいプラス思考のイメージを持つことが大切だと思う。私も自分の生活において悪い所ばかりを見つけようとしているさびしい心を一切捨てて、人の良さ、物の良さを見つけられる人になりたい。そうすれば、「本当の大人」になれるかな!?



調査活動

A組 伊藤 友二

僕たちは調査活動で、神戸大学の都市安全研究センターに行きました。調査活動のテーマは「科学的にみる阪神大震災」ということで、科学的に調査しました。

都市安全研究センターについてみて、教授の方に案内してもらって一番思ったことは、僕の思い描いていた教授像とものすごくちがったことです。大学の教授といえば、ペトローベンのように、自分の世界にこもり、こわそうで、いげんがあるという感じでしたが、今回お世話いただいた沖村孝教授、大内徹助教授、藤波さんは、どの方も、とても優しく接して下さい、ちょっとビビっていた僕は、ちょっとたすかりました。

調査活動では、地震のメカニズムや、その他いろいろな地震についてお話をお聞きしたのですが、少しむずかしかったです。それはどうでもいいのですが、現在でも地震については解明されていない点が多いそうです。そして大学の方々は、一軒一軒調べ上げ、コンピューターに入力していくというとても大変なことをしておられました。これから地震の解明のために入力が続けていくそうです。そして僕は、今まで、誰も解明したことのない問題をとくことは、なみたいていのことじゃないと分かりました。いろいろな成功の影には、数えきれないほどの努力と苦労があるのだということが分かりました。



調査活動を行って

A組 石垣 圭久

今回の修学旅行で私が得たものは、阪神大震災における科学的面からの知識だった。調査活動という時間を、私達の班は「地震を科学的に見る」ということで、神戸大学工学部を訪れた。しかし、物理の

勉強をしていない私達にとって、むこうの教授方の初歩中の初歩でも、暗号をつらつらと並べられている気分だった。ガル (gal) だとか疎密度とか。しかし、弾性反発説と呼ばれる正体不明の説は図で表されており、イメージ化できた。どんな難しい事でもイメージにできれば理解できるものだと思えた。そして、図解の分かりやすさを知った。

仕方がないのでつらつらと述べられる暗号をつらつらとメモしていった。

その後、その近くの地下七メートルの位置にある地震観測機を見せて頂いた。

学校に帰ってから、教授方の話を聞いて学んだ事を理解するための勉強会を行ったところ、一応それぞれ理解できた。うろ覚えなので忘れないようにするのが大変だが、解ったときはうれしく、楽しく思えた。そして、知ると共に「こうならばこうなのではないか?」という疑問が常にでてくる。これが科学の楽しさなのかもしれないと思った。



3つの教え

A組 岡 智彦

「3月14日、晴れ。」

この日は、班ごとの調査活動だった。僕らの課題は、震災に対する設備のことだった。最初は、フェニックスプラザでは神戸が中心になっている、「フェニックス計画」についての説明や地震当日のおそろしさの話を聞きました。

次に、消防署へ行った。そこでは、1月17日の日の対応の仕方について聞いた。いつもは、4人で1チームの所を、2次災害としておこった火災のために4人→3人に変えて、1チームつくった。本当は消火をしなければならないはずの消防車もあつというまに、くずれてしまって、使える物では、なかったらしい。しかし本部には、予備の車があつたのでそれを使って活躍したらしい。

最後に、ふつうのビル等では、どのような設備をしているのかを聞くために、デパートの方へ行った。このデパートは震災後につくられたため、設備は、ばんぜんに整っていた。煙をかんちする機械、それで火事と判断したら水を出す、スプリンクラーなど、何においてもすごかった。

あと、一つの感想として、震災がどれだけこわいか、震災には、どんな対策が必要かおしえられた。



交通の面からみた阪神大震災

A組 木村 正

完璧といたいぐらい順調に進んだ僕らの調査活動の班は、関西の鉄道徹底分析というテーマで調査を進めていった。

当日、僕たちは、阪神電鉄本社、阪急電鉄本社、交通科学博物館、神戸市交通局の四か所を訪れた。どの場所でもていねいに説明してもらったりたくさんの資料をもらったりとてもためになった。そこでは、阪神大震災の被害や鉄道の復旧、会社の事業、歴史、新事業やちょっとした裏話までいろんな話を聞かせてもらった。中でも今回の修学旅行のテーマでもある震災については、たくさんのことを聞かせてもらった。

四か所のどこへいっても本当にひどかったという答えがかえってきた。ビデオをみて本当に阪神大震災がすごいものだというのが分かってきた。けれど阪神、阪急、神戸市交通局にいてもあの時刻に地震がおきてくれたのがせめてもの救いだった。ラッシュ時におこっていたら……。と語ってくれた。僕もそれだけは本当によかったなと思っている。鉄道が全線開通したのが6、7月。震災がおきてから約5ヶ月。それまでいろいろな苦労があったと話していた。代替バスを運行したり一日でもはやく運転再開するために工事をいそいそ大変だったと思う。でもそこからみごとに復旧したのだからすごいと思う。今まで他人のことだと思っていた阪神大震災だがこれからは、自分達のものだと思って受けとめたい。



神戸で学んだこと

A組 杉 森 一 幸

調査活動ではいろいろな事を学んだ。人と話す時の態度、訪問先でのマナーなど。この調査活動は本当に自分のためになったと思う。僕達の班はボランティア団体「ボコアボコ鷹取」の神生善美さんが住んでいる仮設住宅について調べた。神生さんや同じボランティアをやっている人達はとても親切でとても優しく良かった。ボランティアをすると一体どういう点がいいのかと聞くと、ボランティアをすると人と人の輪ができるということをおっしゃっていた。鷹取中学校の中にコミュニティールームというのがあって中にはボランティアに関する資料がいっぱいあった。このコミュニティールームは誰でも気軽に入れるようになっている。ここでボランティアの大切、良さなどを知ってもらおうという意味で作られたそうだ。また、阪神高速道路公団神戸管理部の神門さんに阪神高速道路について、くわしく説明していただきました。623日という長い時間をかけ復旧された阪神高速道路は今にわたって来ている。復旧された阪神高速道路やボランティアは神戸市の住民に明るい印象を与えてくれたと思う。僕はボランティアにあまり関心を持ってなかったが神生さんの話を聞いているとボランティアをやってみたくなった。また、神戸という町はどのような所かわからなかったが、調査活動をするにつれどのような町かわかってくるような気がした。そういう意味でこの調査活動は成功したと思う。



楽しいこう

A組 竹 下 雄 大

調査活動、これは修学旅行の中で一番楽しみだったが一番不安だったものである。しかし計画はちゃんと立てた。しかしそれをやぶってしまったのだ。そのため時間がずれてしまった。やっぱり計画は守るべきである。そのためずれたのだから。逆に計画が不十分でおもいきった行動にでてまにあった時もあった。ちゃんと計画は完べきの一手前だと思っていた。自信過剰になるのもだめだそれと臨機応変に動く。苦労話はまだまだあるが本当に不安だったのが行きさきの人がちゃんと話してくれるかだ。しかしちゃんと話をしてくれた。しかも自分たちが予定した時間いっばいに。それが一番うれしかった。一生懸命に僕たちにわかるようにわからない所はより細かく。救急車や店内案内など。自分が今時間に遅れそうなら電話をすとか、場所がわからないからインフォメーションまで行き聞くとか、そういうことがスムーズにできていた。その点は昔ならお前が行けとかいったが今回は自分で行くようになっていた。自分が得たことは計画をちゃんとたててなくてはいけない。もしその計画が不十分なら早く違う手段を考えること。しかしそこで落ちこんだりしてはいけない。いつでも楽しくやっていたといい手段がでてこないだろうし、違う事を考えてしまうかもしれない。だから楽しくやるという事は何をやる時にでも必要なかもしれない。この楽しくやるというのが調査活動で得た一つなのだと思う。これを忘れず何でもやっていこう。



ハプニング

A組 谷口智也

ぼくが修学旅行へ行って一番心に残っているのは、調査活動だった。なぜかという、たくさんのハプニングがあったからだ。

初めのうちは順調だった。地下鉄に乗って梅田駅へ行き、そこでJRに乗りかえる。そして、神戸の三宮駅に着く、そして市役所に行く。市役所では何事もなく、事が進んだのだけが問題はここからである。次の目的地の場所がわからず、20分ほど神戸の町をさまよったのである。市役所が早く終わったからよかったものの、市役所で予定通りいっていたら大変な事になるところだった。ハプニングはまだ続く。その目的地は市立博物館であったが、そこには、目的の展示物はなかったのである。450円の入場料をまるまる損した気分だった。

その後昼食をとり、次の目的地である海洋博物館へ行った。入場料を払って中に入る。またしても目的のものが無い。今回の被害は250円だった。

目的の物が無いというハプニングが二度も続いたおかげで、予定より1時間30分ほどあまってしまったのだ。ぼくたちは、その時間をなにもせずにすごした。すごくひまだった。

調査活動が終わった後、ほかの班の人たちは満足げな顔をしていたが、ぼくたちははまっていた。班員はみんなこう思っただろう（ほかの班の班員だったらな）と。



調査活動

A組 藤堂伸勝

初めに行ったフェニックスプラザで少しまよってしまい10分ぐらいおくらせてしまったがおくれたことも気にせずにフェニックスプラザの人達は、親切にしてくれてとてもうれしかった。最初にビデオを見たのだがそれには阪神大震災の対策や被害状況が上映されていた。その後一つ一つわかりやすく教えてくれてレポートを書くのにとても適していた。生田消防署では、震災でこわされてしまい場所が少しかわっていた。仮設住宅になっていたということもあり見つけにくかったが時間内につきあった。震災後の状況や消防署の設備（救急車）などを教えてもらいとても勉強になった。救急車の中を細かく見せてもらい普段見えなかった場所や道具などを見せてもらい感動した。最後におみやげをもらい迷惑をかけてしまって悪いなあと何回も思った。ハーバーサーカスでは、最初に玄関の前に案内人がたっていた。ビデオを見たあとハーバーサーカスのとてもえらい人が来てこちらの質問について答えプラスアルファのことまで本当に細かくしかもわかりやすく教えてくれた。その後でパート内を歩きスプリンクラーは火災や煙などが起こった時に水を大量に降らせて火災をしずめるなども教えてくれた。この調査活動で僕は、1時間や2時間のために本当に気持ち良くも教えてくれたし、本当にわかりやすく正確に教えてくれみんなの優しさにふれることができ自分が一回りも二回りも成長したのではないと思う。



調査活動

A組 西 辻 一 真

僕が、調査活動で調べたことは、関西国際空港と神戸空港についてだった。

関空は、はじめアボをとれなかったが厚君の祖父が案内してくれた。関空の中には、震災のつめあとがけっこう残っていた。ひびが床にはいっていたりして、新しい空港なのに壊れていた。他にも震災の教訓を生かし、消火器やスプリンクラー、消防署等がたくさん設置してあった。他にも住民との争いを避けるためいろいろな工夫がされてあった。

神戸空港について調べるために神戸市役所へいった。神戸市役所周辺にもいろいろ被害が出ていた。神戸市役所の旧舎は震災の時、つぶれてしまったらしいが今は直っていた。しかし僕たちは新しいビルへ行った。そこに入ったとたん、僕はとても緊張した。担当の人に会う時、僕の緊張はピークに達した。担当の人と話している時もほとんど聞きたいことを言われてしまい、質問ができなかった。

神戸空港は、ポートアイランドの沖にできる埋立地の上で関空と同じだった。近くに関空があるため、国際線ではなく国内線になるらしい。神戸空港を建てる理由は主に3つあった。飛行機の需要が増えているのと神戸の復興そして進展のためらしい。まだ他にもたくさんいい事をきけた。今回の調査活動を通していろいろなことを知れた。



最高の体験

A組 廣 沢 享 之

修学旅行を振り返って、今回の調査活動はとても疲れた。それは、ただ単に夜あまり寝ていないことや風見鶏の館までの坂道を走って登っていったからでなく、訪問先で聞いた話や、見たことがとてもすばらしかったので、その内容を聞きのがしたり、見のがしたりしないようにしていたため、集中力がきれてしまったので精神的に疲れてしまったのです。

その調査活動は、まず阪神・淡路大震災復興支援館へ行き阪神・淡路大震災はどんなものだったかを調べる予定だったが、そこで阪神淡路震災復興計画という計画を見つけたので予定を変更して、その阪神淡路震災復興計画と阪神淡路大震災を調べることにした。おかげで、予定の時間内は支援館内を走りまわっていたので、骨が折れるほど疲れた。その後、そごう神戸店へ行き、そこで震災対策などどのようにしているのかなどを聞きました。そごうでは、震災対策として、耐震壁をつくったり柱や非難階段を増設したりしたそうです。そして、1番被害の大きかった本館北側中央部は解体し、サンファレ広間という広間にしました。そのため面積は減少したので、声り場面積も減少させたそうです。それは、来店したお客さまに、ゆったりとして買い物をしてもらうためにそうしたそうです。

振り返ってみると、つかれたけれど、最高の体験をしたと思う。



震災の傷

A組 山田和俊

この修学旅行の調査活動は今までのもとは違い少し特別だったと思う。今回は自分達で調べたいと思ったこと以外にも、阪神大震災のことを調べた。その話を聞いて僕は今まであまり実感がなかった阪神大震災をすごく身近に感じるようになった。

阪神電鉄会社と阪急電鉄会社では神戸の交通と関連しての震災の話を聞いた。神戸ではほとんどの陸橋がこわれ、線路も、鉄でできているとは思えないぐらいにぐにゃぐにゃになっていた。会社の中でも犠牲者が出たし、家もたくさんつぶれたそう。この話をしてくれた人も地震によって家が半壊し、まだなおしていないらしい。地震後数カ月は線路が修復していないので電車を走らせることができず、会社の人々は仕事ができなかった。

この阪神大震災の悪夢から2年の歳月がたち、現在では新聞でもテレビでもほとんど記事にならなくなった。僕達神戸のことをよく知らない人は神戸は震災から立ち上がったと思っていたが実際はそうではなかった。神戸では震災のためにくずれた家がたっていた場所に空地が見えるし、学校ではたくさんの仮設住宅が立ちならんでいた。震災によって家が壊れたためそのまま県外にひっこし、帰ってこない人もいるらしい。

震災によってうけた傷は内にも外にもまだ残っていることがわかり阪神大震災の恐ろしさがあらためてわかったと思う。



阪神大震災のかくれた姿

A組 朝日智子

灰色の雲が空をおおう中、私達は宿を後にした。足を踏み出した所には、背の高いビルが立ち並び、走っている車が後をたたない。なにもかもが私達の住んでいる福井とはスケールが違い、あっけにとられてしまった。しかし、阪神大震災から約2年が経過した今も被害のつめ後を残し、地震の恐ろしさを物語っているようだった。私達は、大阪および神戸を舞台にした全くの新天地で、多様な鉄道交通からみた阪神大震災について調べた。

震災直後の神戸——。線路が蛇のように曲がり、今まであった駅が後かたもなく消えさっていたという。これを昼夜とわず、また人をとわず皆が一丸となって復興に努め、現在では見ちがえるように復興が進んでいる。しかし、阪神大震災によって建物ばかりでなく、人の心にも大きな傷あとを残した。そしてこの心の傷こそ建物や機械を直す以上に時間がかかると思う。本当の意味での復興は、まだ始まったばかりだ。でも人々は、復興にかける熱意と相手を思いやる心で自らが心の傷をいやしている。今回の阪神大震災によって、私達人間は、交通の大切さということと、何よりも心を思いやる温かい心を改めて思い出すことができた。震災は人の命をうばい、建物を破壊するという許せないものだが、違った面から考えれば、天が私達に与えた試練なのではないか。この試練により人間の運命は左右される。今、人間の進化が問われるときなのだ。



修学旅行じゃない修学旅行

A組 尾 関 愛 子

「ちえっ、東京だったらよかったのに……。」

それが私の修学旅行のイメージだった。なぜなら、神戸、大阪どれも私がよく訪問したところのあるところだったからだ。どうせ知っているところを班行動でだらだらするんだな……、ああ一人で行動したい……。と思っていた。そして、調査活動での地下鉄移動、いろんなところの散策全て思っていたとおりになった。たとえば、歩くのが速ければ、遅くしろとさいそくをうけるというように。

しかし、実際は少し立場違ったように思えたこともあった。それは、私が神戸、大阪について人より少し上手だったことだ。だから、つれ回されるのではなくつれ回す方だったように思う。つまり、空想かも知れないが、運動、芸術、その他もろもろでリーダーシップがとれなかった私が少しは、リーダーシップがとれるようになったような気がした。また、少し観光地の添乗員のような気もした。そしてこれは、異国風文化や阪神大震災、演劇などの学習よりもさらに大きく楽しいことだったように思う。私は、もうここ福井を去るが、転校先でうまくやっていくきっかけになると良いと思う。修学旅行中も日常生活でも文章中でもミーオリエンテッドでごめんなさい。また、修学旅行にたずさわった方々どうもありがとうございました。いつもとひと味違った旅行でした。



オシャレな街

A組 桜 井 麻里子

調査活動を終えて、私が学んだ事。それは、人々の明るさだった。震災で家をなくした人がたくさんいる神戸。だけど人々の表情は明るかった。いや明るくふるまっているのかもしれない。私の班が調査した「そごう」ではお客さんの事を考えて、建て物の中央をガラスばりにし、昼には、中から外が夜には、外から中の明るい様子が見られるように工夫されていた。柱はいつ地震がおきて、崩れないように、太くなった。しかしその柱は色紙をとりつけていて明るい雰囲気を出してなかった。一番被害を受けた場所は、「サンファール広場」となり一時間ごとに鳴るからくり時計が設置されていた。これらの事はお話を伺う前までは何とも思わず、ただただ広いデパートだなあと思っていなかった。と、いうよりも、こんな風景に見なれていてごく普通のデパートにしかならなかつた。しかし、私達に説明して下さった方がすごく熱心だったので聞くたびに「なるほどなあ」と納得させられてしまった。こんな所にもあんな所にも、と私の気づかない所にたくさんのお客さんに対する気持ちがこめられたデパート。そごうとはこんなデパートだった。私の住んでいる福井にもこの様なデパートがきっとあるだろう。私達の目のとどかない所で、今も何か工夫されているのかもしれない。いつ福井に地震が起こるか分からない。私が学んだ人々の明るさや笑顔を大切に、忘れないようにしようと、この時思った。



気さくな神生さんとその仲間たち

A組 寺澤千尋

「やぁ、ごめんなぁ。待った？」

早く駅に着きすぎて、30分ぐらい駅の出入口に座りこんでいた私達に声をかけた人。これが神生さんだった。優しい顔で、すぐく明くるて、笑顔で私達を迎えてくれた。

「まぁ、着いてきてや。」

と言って私達を連れていった所は、仮設住宅の立ち並ぶ駅の真横の所で、そこにはお年寄りの方などが住んでいた。すまなく並べられている仮設住宅はまるでブロックの様だった。ほんの少し歩き、神生さんが住んでいる仮設住宅につくと、私達はあるように進められた。初めて入る仮設住宅にちょっとドキドキした。

「失礼します。」

初めて入った仮設住宅はちょっと傾いているような気がした。机とざぶとん、棚など以外はほとんど何もなかった。しばらく話をしていると、神生さんが私達に

「ほな、鷹取中学校に行くか？そこにボランティア本部があるねん。今日ちょうど卒業式らしいし。」

と言って私達を鷹取中学校まで連れていってくれた。私達は何の関わりもないのにその卒業式会場に入れてもらい、一緒に拍手を送らせてもらった。その帰りである。

「ボランティアは一体何をやっているのですか？」

と私達はなにげなく質問した。神生さんは明るく、

「主に援助物資の受け付け、配布やなぁ。まぁ好きでやっとなるから全然大変だとは思わんなぁ。」

と答えた。でもすぐボツリとさみしそうに言った。

「ボランティアを分かってくれん人達も少なくはないんや。」

神生さんはとても悲しそうな日をしていた。

その後神生さんは土地問題について説明してくれた。顔をうかべていたが、その日には、今もいろんな問題に悩む人々の苦しみがあった。神戸はめまぐるしい勢いで復興を続けている。しかし、その影で今もこの現実苦しんでいる人達がたくさんいるのだ。神生さんの話を聞いていると、今もお現実と戦いつづけている人達の声が聞こえてくるようだった。

神生さんの仮設住宅に戻ると、明るいおばさま達3名が私達を迎えてくれた。

「昼食おごってあげるよ。いいのよ心配しなくても。おばちゃん達お金持ちなんだから。」と言って心よく昼食をおごってくれた。私達は有難くカレーライスをおごってもらい、しばしの間みんなと楽しい時を過ごした。さっきとは違い、今度はどんな困難をも乗り越え、毎日を明るく過ごしている神戸の人達を見る事ができた。ちょっぴりうれしかった。

神戸の人達はまだいろんな問題を抱えている。でも人々はそんな事には少しもめげず、毎日を明るく一生懸命生きている。時にはいやになる事もあるだろうし、泣きたくなるかもしれないけど、みんな笑顔で過ごしている。がんばってる。そんな神戸の人達を見て、人々の復興にかけろ大きな力を感じた。今私は神戸の人達に言いたい。「あなた達がいろのかぎり、どんなに苦しくても神戸は不滅だ」と……



立ち直った神戸

A組 藤 尾 春 佳

14日の朝、今日がいよいよ調査活動の本番なんだなと思った。今までに多くの時間をかけ、数々の店にあたって立ててきた計画が今日実行されるんだという興奮とうまくいくだろうかと思う不安が入り交じる中、私たちはポケベルを受けとり、一つ目の駅へと向かった。

初めに訪れたのは北野異人館。私たちの調査テーマは「異国風の文化とおかしの歴史を探る」ことだったので神戸の異国文化の一つである異人館を見学し、また震災の被害についても調べに行った。見てみると思ったより被害の受けたところは残されておらず、ほとんどの館が想像していた通りのどこか異国的な雰囲気をなくさずに持ち続けていた。この雰囲気こそが他にはない異人館の、また神戸の文化の特徴なのだ。私は神戸の文化が震災によって消えてしまうことなくそこにあるのを見て何だかほっとした。

二つ目の訪問先は洋菓子店だったのだが、ここで聞いた話でも、異人館でも、私は地震という災害からすばらしく立ち直った人々の姿を見たような気がする。異人館を修復する人たちの姿、震災直後にはコーヒーやケーキを配ったという洋菓子店の人の話、私は自分たちの町を生活を文化を、そして夢を守ろうとする人々の力におどろいた。私が見たのはまだまだ復興した一面だけかも知れない。でも人々にこの力がある限り、神戸はきっと昔以上の街になるだろう。



二日目の調査活動より

A組 古 橋 里衣子

3日間の修学旅行の中で一番楽しく心に残ったのは調査活動だった。自分達が立てた目標で、計画で進行するところがとても魅力的だった。楽しく心に残ったのにもこれがあったからに違いない。

私達の班は3人のメンバーで、テーマは「神戸の由緒あるビザを調べよう」だった。3店のイタリアン料理店に行って作り方を教えてもらおうというものである。私達は私鉄を主に利用して移動した。アポ先についたら写真を撮らせてもらい、いくつかの質問をした。アモーレ、アペーラさんでは、店長の住んでいた家を改造して建てたり、自分の家で材料をいくつか育てていらしゃった。私達は調査するお店にはそんなに被害をうけなかったと仮定していたが、それは全くの間違いであった。3店とも大きな被害をうけて開店までの道のりがとても大変であったと聞く。

調査活動によって、普段テレビで放映されないところまで見たり、被害に遭った人からお話を聞くことができ、それによってもう一度阪神大震災の恐ろしさを改めて感じた。それと同時に、人と人の関係やつながりが最も大切なものだとは私は感じた。

私達が神戸に行き、もってきたものは、その町の活気と希望だった。福井にも、どの県にも天災はくる。この時、必要になるのが神戸からもってきたこれらだと思う。震災によって奪われた命を私達は無駄にしてはならないと思う。



新しい発見

B組 桜井優広

僕は関西国際空港の震災時のやくわりなどについて調べる為に、大阪、神戸両市役所に行ってきた。調べた中でも特にすごいと思ったのが、関西国際空港が開港することにあたっての大阪府内の市への影響

だった。

関空が開港することによって大阪府内へ外国人が沢山来ることになる。そこで関空開港2年あまり前の平成4年ごろから、府内に20以上ものホテルが作られたのである。これは正に関空無しには語れないものである。また、関空の工事には1兆458〇億円もの費用がかかり、その中でも3億4000万円は福井県が出したということである。僕はこの話を聞いた時「すごい」の他に思ったことがあった。協力の大切さ、である。ホテルを作る為には、関空開港が必要。関空開港の為には、他県からの援助が必要。ということである。何事をするにも他の人の手が必要。人の手がないと何もできないということだった。現に関空の地盤は六甲山からとってきたというし、関空ができたことによって国際会議が大阪でよく開かれるようになったそうだ。

僕はこの話だけでも「協力」の大切さを知った。でもまだまだ調査活動のまとめをすることによって他にも色々なことを知れるかもしれない。そしてそれが分かったらまたの機会にでも知らせようと思う。

震 災

B組 土田悠貴



僕達の班では、調査活動で震災が神戸にどのように、どれくらいおよぼしたかということ調べた。

それで分かったことは、神戸市での全壊・半壊の住宅戸数は、全住宅数の4分の一にあたる約10万戸でした。そのなかでも、昭和55年以前に建てられた家や一階がピロティの家や屋根が瓦などでできている重い家だった。一番最初の理由は、耐震基準が昭和56年に新しくなったので、その後建てられた家は倒れにくかったそうだ。二つ目の理由は、1階が駐車場などの壁が少ない家が倒れたそう。

他には、高層ビルが地震に対する対策を調べた。一般の鉄筋コンクリート造建物には制震技術で、超高層ビルには免震技術により地震から逃れようとしていた。制震技術とは、地震を力でおさえビルを地震から守る技術だが、免震技術とは、地震の力を受け流して、ビルを地震から守る技術だということがわかった。

これ以上の知識を得るためには、市役所の人たちの、多くの力があつたからこそできたことだったんだと思う。このことを生かして、調査活動がよりよくなり、誰に見せてもはずかしくないものをつくっていかうと思う。

最後に多くのことを教えてくれた市役所やフェニックスプラザのみなさまありがとうございました。



いい経験調査活動

B組 佐々木 英雄

調査活動では、大阪・神戸をまわって調べた。そして、バスや電車などの事をよく把握しておかなく少し時間におくれ迷わくをかけてしまった。

それでも、グリコの人は親切に教えて下さってよかった。グリコ本社では、資料館を見せてもらい今では決して見る事の出来ない「映画村自動はん売機」などを見る事ができた。それに、江崎利一さんの生がいやグリコの生まれなど、普段なかなか分からないことが知れ良かった。

グリコピアの方では、単にお菓子の事だけでなく、栄養の事やまた未来や過去のお食生活についていろいろな事をくわしく教えてくれた。

この調査活動を通して、菓子の事はもちろん、グリコのような大企業の商売なども知る事ができ、テーマ通り「グリコの真髄にせまる」という事が少し達成できたと思う。

それと、調査活動を振り返って反省してみれば、自分はほとんど計画をたてたり、事前調査する事をおろそかにし、人にまかせっきりだったと思う。

だから、これからはいろいろな事において、今回の自分の欠点を少しでも多くなおして活動していきたいと思う。

今回は、本当に多くの自分の欠点を見い出せたいい経験になったと思う。



調査活動で学んだ事

B組 文 村 卓 矢

修学旅行を振り返って僕は、調査活動が一番心に残っています。調査内容は、「商店街の震災前と震災後の違い」で、元町商店街三宮などへ行きました。しかし、震災のつめ後は、少しもみられませんでした。けれども、色々な店に行き質問していくと、店の人が泣いてしまいました。その時一つの事を学びました。いくら震災のつめ後がなくなったとしても、人々の心には、深い傷がある事を学びました。だけど、その深い傷も人々は夢でいやそうとしていました。商店街の床のパネルに色々な事が書いてあったのです。それを見た時僕は、とても感動しました。

次に学んだ事は、大丸デパートの様な大企業などは、物がないためとても大変だったと教えてくれました。そして、今やっと震災前の80%ぐらいになったそうです。

この調査活動を通して、色々な事をたくさん教えてもらい、そして学びました。震災の後いくらつめ後がなくなったとしても、人々の心には、一生残ります。そして、それらの事を、夢などによっていやしていこうとする人々。僕は本当に本当に感動しました。

この調査活動で学んだ事を、これからの自分の人生、未来に役だてていきたいと思えます。

最後にこの調査活動で、色々な事を教えてくれたみなさんに本当にありがとうございました。



調査活動で学ぶこと

B組 安田 一 晴

僕は修学旅行で最も期待し、それでいて最も不安だったのが、2日目に行われた調査活動だ。他の人達が旅行のメインを何と考えているかは、わからないが、とにかく僕にとっての最大のメインは、2か月前から、旅行に向けて一番早く取り組みだしたこれだろう。自分達でテーマを決め、アポを取り、計画をたてた。1年生の時に一度やっていたが、今回は全体的にレベルも高く、後になってから、自分もこのようなことに対して力がついたんだと思った。当日、出発後即刻、大阪で迷った時はヤバイと思った。けれど、自分達で臨機応変に物事を考え、列車などを乗りかえて、約束の時間には訪問先につけて、本当によかったと思う。僕は調査活動の本当の意義は、ここにあると思う。確かに、自分が調べたいことをテーマをもって調査していくことも大事だが、社会に出て、どのようなときに、どういう行動をとればよいかということを学ぶ機会でもある。なので、そこをのころをよく考えていきたい。話は少しズレルが、震災学習の時にある先生がおっしゃっていた「人は自分の夢や、将来のために学習するんだ」という話はとてもすばらしかった。調査活動も正にその通りだと思う。他人のためではなく、自分のために調査、学習していき、いろんな力を蓄えていく。一つの「夢への貯金箱」だ。そして、それをあける時は、自分が困難なことにあった時、きっと何かを気づかせてくれるだろう。最後に「調査活動成功バンザイ!!」



震災について

B組 笠 場 一 由

修学旅行の3日間僕は、フェニックスプラザまで歩いていった。そこで僕たちは、阪神大震災について聞いた。まず、附属中学校の代表の人たちが、福井大震災のことについて、発表した。その発表を聞いてから阪神大震災と比べた。阪神大震災とは1月17日5時58分ごろ神戸中心に大地震がおき、多くの人たちが命をなくした。その神戸の大地震の強さは、修学旅行2日目から知った。修学旅行2日目では、調査活動をした。僕たちの班は、震災がもたらした商店街への影響ということについて調べた。商店街の人たちに震災のことを聞くと、その時のことを思い出してなきだした人もいた。

僕は、かなり大きな地震、そしてその人の友人もたくさん死んでいたのではないかと考えた。2日目から僕は阪神大震災のすごさを知った。フェニックスプラザの人たちの話を聞くと、みんな一人一人仕事をさがして、人の役にたっていたそう。僕には、ぜんぜんできないことだと思った。

差別のこともそう。非難所は、こみ合い食べ物がもらえない状態で、やはり差別は出た。しかし、学校の生徒たちは、呼びかけ、などをして学校の生徒たちは、差別をなくしたそう。

この震災学習を終えて僕は、こう考えた。もし福井にも大地震がおきたら、一人一人が仕事を探して差別もなくし、県でまともなことをしたいと思う。



地震は、心を傷つける

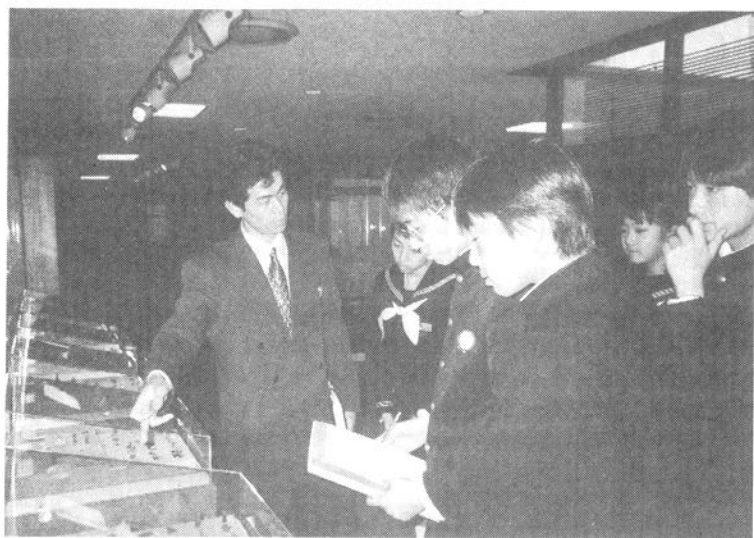
B組 杉 川 智 哉

地震はほんの数秒のうちに、ありとあらゆる物を破壊してしまう。まるで何かをあざ笑うように。

僕は、地震の被害のビデオを見たとき、ここは本当に日本なのかと思った。震災のビデオは何度も見たことがあるが、今回見たビデオはとても印象に残った。それは多分鷹取中学校の校長先生の話聞いたからだろうと思った。阪神淡路大震災を間近に体験した校長先生の話は、とても生々しく瑞々しかった。鷹取中学校の先生の行動、生徒の行動、そして、鷹取中学校にボランティアにきた人の様子は素晴らしいと思った。自分たちも震災を受けたはずなのに、学校にボランティアにくる生徒たち、校長先生は、間近に受ければ誰でもできると言われましたが、僕にはできないと思った。

僕は、地震で受ける一番の被害は心の傷だと思った。くずれたビルも折れた橋もつぶれた家もいづれなおすことができるが、家族や友人、親族が亡くなるなどで受けるものは百パーセントなおすことができないと思う。校長先生も、一人の親友が亡くなられたとおっしゃっていた。この話をしている校長先生の目は、少し涙ぐんでいた。僕も少し涙ぐんでいた。これが地震というものなのかと本当の地震の意味を知り、おそろしくなったからだ。

僕は、この話のすばらしさを、そして校長先生の目を絶対に忘れないと心に誓った。



グリコ・・・そして

B組 西 直 人



調査活動で「グリコ」へ行った。一つ日グリコ本社ではいろいろな数値的な事が分かった。グリコ売上はこのごろは約1,500億円くらいらしい。震災の年売上げが落ちたのは、震災よりもバブル時代の終わり、という事の方が影響が大きかったらしい。現在お菓子業界3位（1位明治、2位は公表されていないもののロッテ。ちなみに4位は森永で、これはグリコといい勝負で二つの会社はライバル同士である）のグリコであっても、市場の調査、世見の好みの移り変わりの調査なくしてヒット商品を生み出していけないのである。もちろんアイディアも大切である。よってグリコには商品研究開発部なるものがあるそこでアイディアを製品にしている。グリコは一つの頭脳集団であると言える。まあ、企業が全て行動主体でも困ってしまうが。そんなこんなで、グリコのことはいろいろ分かった。グリコの創始者江崎利一は偉大である。人々の健康を守る。グリコ開発時の志はそれであっただろう。さて、グリコピアである。行くのにタクシーを使った。タクシーの運転手はいい人だった。忘れられない出来事の一つである。グリコピアについて。体験、見学コーナー主体で、それを目的とした施設である。いろいろ分かった。お菓子の歴史も、そして帰った。つかれきっていた。電車でねてしまった。しかし、よかった。何が？調査活動である。日ごろやってよかったと思うことのない中、それに入る出来事だったと思う。

調査活動で感じたこと

B組 清 水 佳芳里



私は、修学旅行で一番心に残ったのは、やはりメインである調査活動でした。テーマは、「商店街の震災前と震災後のちがいを」で、元町商店街・三宮などへ行きました。そこでは、震災の後という面が、ほとんど見られませんでした。しかし、店に行き、色々質問していくうちに、震災後一番大きく傷ついたものに気付きました。

最初に、元町商店街にあるフルーツ屋に行きました。そこで、いくつかの質問をしました。その中に、修学旅行で深く心に残ったものができました。それは、私たちが質問していた途中に、フルーツ屋の店の人の目に出てきた何粒かの涙でした。その涙は、私たち班員の心の中に、阪神大震災のくやしき・悲しみを、どの資料よりも、一枚の写真よりもはるかに大きくものがたってくれました。一粒の涙が私たちに、色々なことを考えさせてくれました。あと一つ感動したのは、商店街の道のタイル100枚くらいに、夢みんなでおいかけようなどと神戸市民たちの願いなどが書いてありました。私は、それを見て市民たちが、一つに団結して、目標に向かって走っているのだと思いました。それと、質問しているときに、気付いたことは、大震災で、一番大きな被害をうけたのは、どんなに有名な建物ではなく、人間、動物などの心だと思う。その被害は、月日がたってもそう簡単に治るものではないでしょう。しかし、神戸市民は、今未来に向かって一番翔いているだろうと私は考えました。



不安に満ちた調査活動

B組 高橋 絢子

「え。そんなことあったっけ。」

昨日から既に失敗をしている私はまたか……という気分になった。そんなことすっかり忘れていた、ということがこの日当日になって初めて知ったのだ。私は、瞬間頭の中真っ白、顔面蒼白になった。そんな、班長として班員の皆を引き連れていかななくてはならない立場の私が当たり前のことも忘れていたのだ。

そのミスは何とか補うことができた。かろうじて、だが。それでも朝一番出発の前に重大なミスをしてしまったことは私自信に非常に大きくこたえたダメージとなった。出発をしてからも朝のことを考えてしまっただけで胸の中は不安でいっぱい、口を開けると出てくるのはため息ばかりになった。班長として失格だ。あんな、あんな重大なミスを、とそればかり考えて後悔が後から後からひっきりなしにおしよせてきた。そのため、ただでさえ初心者の私は今自分が行っていること、一步一步この足を踏み出すのさえ恐くなった。さっきのミスは、重大だけどまだとり返しがついた。でも、こんどまたへまをしたら今度こそもしかして取り返しがつかないかも、そう考えると泣きたいような、みじめな気分になった。

くら本から一緒だったある班と別れてしまいこれから本当に私達だけになった梅田駅。なんの変哲もないこの普通の駅がその時の私には大きな運命の別れ道とも思えた。最初の方はよかった。まだアポイントメント先に行く予定じゃなかったから。確か2時間ほど時間が余っていて、周辺のことに関して見ておくという話だった。そのうちに次の目的地を探しておくことにしようという提案が出た。ま、とりあえずって感じで探した。でもいけど探せど見つからない。結局近くの人に聞いて見ることにしか私達に目的地を探すことができる方法がなかった。このときの気持ちもいい表せないほどみじめだった。班長として把握すべきことも分かっている。適当に探せば見つかる、すごく安易な考えだった。

ま、そんな感じで進んではいったが、合流すべき班の遅れ、ポケットベルがなるなどの様々なことが私の不安をいっそうかきたせた。その結果が、昼食にまともなものを食べられなかった。調査内容の一つが抹消されるなどと表に表われてきたわけである。

今回の調査活動。私としては改めて深く反省すると共に自分のいい加減さ、ふがいないさにあきれ、そして悲しくなるものになって苦しい思い出として残るわけである。でもそんな中から学んだこと。

1. 自分がいかにいい加減かが身にしみてよく分かった。
2. そんな頼りない自分に口ではぐちをこぼしながらも最終的にはついてきてくれた班員の優しさ。
3. 人間最後はきっとどうにかなる(?)

いいことばかり学んだとはいえないけれども3以外は大切なことを学んだと思っている。普段は分からなかったことだけど、とりあえず分かった。

最後に非常に迷惑をかけた先生方、班員の皆さんへ。

本当にすみませんでした。

でも、ありがとうございました。今度は、次こそは念入りにしよう。それが次の私の目標である。



彫刻の街神戸

B組 船谷 明子

神戸の街を歩いていると、至る所に野外彫刻があるのに気付く。「彫刻の街神戸」こんなキャッチフレーズを、皆さんは聞いたことがあるだろうか。きっと知らない人もいるだろう。しかし、神戸では30年近くも前から、このような野外彫刻の立ち並ぶ街として、大きな大きな「彫刻展」が開かれているのだ。

この市規模の彫刻展が始まったのは、昭和43年。街の文化性を高める、市民に美術的な彫刻に触れてもらう、といった理由で始まったそうで、これは全国的にも新しい試みだったようだ。ここで、私たちの街福井と比べてみたい。実は福井でも平成2年から「彫刻のある街づくり」が行われているのだ。しかし神戸の360点の彫刻に対し、福井はたったの17点。その差に愕然としたのと同時に、比べる対象にならないことを実感させられた。

けれどそんな美しい街でも、地震は容赦しない。震災で被害を受けた彫刻も多かったそう。そこで神戸は会議をする。地震で変わったその場所に、またそれを置くとどうなるか。場に合ったものを——。私はこれがすごいと思う。あくまでもその場の雰囲気合った彫刻。福井と違う点だろう。あまり言うとう福井がかわいそうなのだが、これから発展を期待させるその福井を、将来この手で動かしてみたい！と思ったりしたのは私だけだろうか。彫刻に限らず、街の雰囲気を大切に、神戸に負けないような福井を目指したい。



神戸から学ぶ ～調査活動を終えて～

B組 野崎 優貴

「まだ震災は終わっていないだね。」

——長田区の焼け跡を目の当たりにした私の口をついて出た言葉がこれであった。とても言葉で表現できるようなものではないが、あの時目に映ったもの一つ一つを、私は今も鮮明に覚えている。至る所に散らばるガラスやタイルの破片。溶けてしまった表札。

焼け焦げてしまった公園の樹木……それら一つ一つが当時の様子を生々しく物語っているようであった。一面に広がる焼け跡のずっと遠くには、何事もなかったかのようにビルが立ち並んでいて、この地だけがどこか別世界のように感じられた。

震災からもう2年が経ち、神戸市内の多くでは復興が進んでいる。そのような中で、長田区のような地域や仮設住宅もいまだに多く残っている。そして被災した人々が受けた心の傷も癒されてはいない。震災はまだ終わってはいないのである。

今回の調査活動でお世話になった有光さんは次のように話された。

「ボランティアは無理をしてまでやるものではなく、自分でできることを自分で探してやっていくものなんです。だからボランティアをやってるからって別にエライわけじゃないのよ。」

そしてこんなこともおっしゃっていた。

「人は人によって支えられている。」

本当のボランティアの在り方を考えるのが今後の私の課題である。



表現の力

B組 毛利公美

私は表現というものを素晴らしく思う。笑い、泣き、怒り、様々な表現が顔にでてその人の感情を表す。その中の泣くという表現を見て、修学旅行中とてもうれしく思うことがあった。

調査活動の時、私達は仮設住宅の方で歌うことになっていた。そのため4つの曲を選んでいた。“故郷” “切手のない贈り物” “おおひばり” “夢の世界を”。たいした曲ではなかったものの喜んでもらえることを期待していた。

「そろそろ歌って下さい。」

と言われ、歌いだす。最初は照れて下を向いていたがこれじゃいけないと思って顔をあげた。そして、はっとした。ボケてるんだよって紹介されたおじいちゃんやさっきまで笑っていたおばあちゃんが目に涙をためている。みんなで1、2回あわせただけの曲を聞いて泣いている。私はとてもうれしかった。一生懸命聞いてくれるのがうれしく、目にたまった涙がうれしいにとてもをつけた。なんとなく私ももらい泣きしそうになってしまう。今まで人前で歌って感動されたことはなかった。私自身も歌を聞いて感動したことはない。だからこそ、意外で驚いていたんだと思う。歌い終わった後も、素直な子達だ。自然で優しい子達だと私達の歌を、そして私達を絶賛してくれた。ニコニコと笑ってうまいねって言うてくれて……。私は今までほめられて、こんなにうれしく思ったことはないと思う。

私がこの調査活動で改めて感じたのは、人の優しさ、心の温もりだ。2年前の震災は人々の心につらい思い出を残したけれど、私が見た限りでは、神戸の人はもうかなり立ち直っている。さら地の所もあったけど、人の温もりもそこにはあった。すれちがう人達はたいてい笑顔の人だったような気がする。神戸は強くて優しい人が集う街だと思う。どんなことにも負けなくて、いろんな人に親切で、私達の歌に感動してくれる。アンラッキーをチャンスへ。がんばってかえようとしている。はっきり言って私はボランティアをしに来たんじゃないくて、人と人との温もりにふれるために来たように思っている。明るく優しい笑顔、心の底からわきでる涙、地球のおこした災害に対する怒り。すべてがまざりあっていたと思う。すべてがみんなの心にあると思う。そして、それは私達福井の人にもあると思う。普段はよくわからないけど、きっとあると思う。笑い、泣き、怒り。それらを持っているんだから……。

あの涙を見て私は大量の収穫をしたと思う。たった一つのことから、考えるという力がもてたはずだ。たった一瞬が私を少し大きく育ててくれたのだろう。修学旅行中の調査活動を振り返って、私は神戸にありがとうの言葉を伝えたい。普段の生活では気付かないこと、今の福井からは知りにくいこと教えてくれてありがとう。

最後に私からもう一つの言葉を贈りたいと思う。

「これからもずっとフェニックス神戸としてがんばって！どんなことにも負けない思い出つまでも笑っていて下さい。」

御旅仮設住宅のみなさん。そして神戸のみなさん。私は改めて表現力があることに感謝したい。なぜなら、みなさんと会えてよかったという感情を表に出すことができるから。



本当のボランティア

C組 大武陽一

「ボランティア」って何ですか。

今回の調査活動では、ボランティアは、やろうと思ってやるものではないということ、あらためて実感した。今、生徒会では、一生懸命、ボランティアをやりましょうといっているが、やる人は、それほど多くはない。なぜか。僕が思うに、多くの人が、ボランティアについて、変な意識、変な先入観を持っているのではないと思う。自分の仕事を犠牲にして、お金を使ってやるのが本当のボランティアだと思っていないだろうか。僕たちが行ったプロジェクト12のモットーは、「無理なく、楽しく、永く」である。決して自分の仕事を犠牲にしてはいけない。とプロジェクト12の代表、有光みさんは言う。まさに僕も、その通りだと思う。まず、自分のできる事をやろう。というものが、ボランティアの根底にあるものだと思う。僕は今まで、何回か、ボランティアという形で、老人ホームに行ったことがあるが、毎回毎回、なにか得るものがあると思う。今回のボランティアでも、口では言い表すことのできないなにかを得ることができたと思う。ボランティアとは、口で言っているだけでは、何の意味もない。口で言った事を、行動にうつして、はじめてボランティアといえるのだ。ボランティアの面白さ、楽しさは、実際にやってみないと分からない。今回の調査活動では、本当のボランティアというものを、少しだけ考えられたと思う。



知識がふえた

C組 大月伯恭

今回の修学旅行の2日目では調査活動をしました。その調査活動で僕達の班は「阪神大震災時の報道機関の働き」のテーマのもとに震災時の報道機関の働きを調べました。それで、報道機関といえば、テレビ局と新聞社が思いますが、テレビ局といえば全国にある「NHK」、新聞社といえば地元の新聞社「神戸新聞社」にアポイントメントの電話をかけ、無事アポイントメントはとれました。

そして当日、NHKと神戸新聞社にいきいろいろと質問をするとどちらの方もていねいに質問に答えてくださいました。そのせいか、僕らが疑問に思っていたことは、僕らの大切な知識にかわりました。

NHK、神戸新聞社のみなさん、その度は、どうもありがとうございました。

僕らの知識になったことを、少しお教えしましょう。

まず、情報についてですが、混乱している中でどのように情報を手に入れたかという、電話はつかえなかったので無線（いつも使えるようにしている）や有線電話（NTTと契約）していたりして、他局と情報交換したりして、いつも放送できるようにそなえています（NHK）

今度は神戸新聞ですが、全ページに震災のことをのせ全国にうったえたりしました。他いろいろな事が僕達の知識となりました。しかも、楽しい調査活動ができました。

明 石



C組 木 津 裕 人

東経135度日本標準時子午線の通る街といえば……。そう明石だ。僕たちはこの街で調査活動をするのだ。でも正直な所、不安の方が大きかった。僕たちの質問に答えてくれるかなあ。でもそんなことを言うてる時間など無かった。行くしかない。後戻りはできない。そして僕はこの不安を強引に忘れて明石駅を出発した。

最初の訪問先は「たこ助」という所だった。そこに行くには魚の棚を通るのだが、そこがまた凄い。生きている魚がたくさんいて、勢いよくはねている。そこにいた人たちも、僕らと目があったとたん、
「どこからきはったん。」

としゃべりかけてきてくれた。これで僕の不安も多少なくなった。

そして数々の訪問先で思ったことは明石焼をやっている人はこだわりを持っているのではないか。震災後、数日で営業を再開されたそうだが、きっと自分の店にきてくれる人たちのためだと思う。将来の明石焼も、今の味や値段は守り通すと、心強い意見が返ってきた。それと明石の人はとてもやさしい。全ての店で明石焼を

「せっかくきてくれたんやもん。おごりや。」

と言ってくれた。もう感謝感激だ。それに仕事の忙しい中、僕たちに実際に明石焼を作らせてくれた。本当にありがとうございました。

ビルの立ち並ぶ中の小さな公園で



C組 志 田 知 優

修学旅行に向かった3月13日。

2日目。僕が最も楽しみにしていたのがこの調査活動である。

僕達は調査活動の目的地へ向かうための電車に乗った。

電車の中は満員で、まだ質問内容（アポ先での）もあやふやな僕達はとても不安になっていた。そしてふと窓の外を見た。ビルの立ち並ぶ中、小さな公園があり、そこに一匹の犬がいた。一瞬だった。白く可愛い犬だった。しっぽを振った気がした。舌を出して、こっちを見た気がした。

その時ふと何年か前の景色と一致した気がした。これもまた気がしただけなのかもしれないが。僕はぼかぼかした気分と、懐かしい気持ちになった。僕の昔飼っていた犬とその犬が似ていた。その犬が僕を見てくれた気がして、心の底から嬉しかった。とても嬉しかった。

僕が昔飼っていた犬はとても頭が良かった。人の言葉が分かるように思え、不思議な力を感じ、幼い僕は驚き、ますます好きになった。しかし、命ある者は絶える。それが悲しく、理解できなかった。

あれから何年か後の自分に会いに来てくれた。そんな気になった。僕は喜び、又悲しいワンシーンを思い出した。でもなぜか、僕はこの犬が僕の修学旅行を支援してくれている気になり、悲しみより喜び、嬉しさの方が勝ったのに気づいた。



調査活動のできごと

C組 富田 洋平

2年前に起きた阪神大震災、すべての交通機関がマヒした中でTVや新聞などの報道機関は一体どうやって情報を入取したのか疑問に思い、またその時どのような対応をしたのか興味をもったので、「報道機関」というものについて調べてみることにした。

まず、午前中はNHK神戸に行って震災時の対応などについて質問してきた。その中でNHK神戸の人は、こう言っていた。

「たとえ、どんな時でも第1歩をだして、人々に少しでも多くの情報を伝える。」と。その他にも、大阪にあるNHKのヘリを使って神戸の街を放送してる時にヘリの音が大きくて、助ける声が聞こえないと、苦情を言われたとか、本社（現在とは場所が違う。）にヒビがはいってとても苦労したなど聞いた。

午後は、神戸新聞社の方に寄せてもらった。まず震災のビデオを見せてもらい改めて震災の生々しさを実感した。新聞社では機械がストップしたので京都新聞社と協力して夕刊をだした。とか、被災者を助ける記事などを書いたことから、日本新聞協会賞をとったり、読者から、「ありがとう」「ゲンキダシテ」などの励ましの手紙をもらったりとまた新聞を書く意欲などがわいたと話してもらった。

こうして考えると報道機関は何らかの方法を使って人々により多くの情報を伝えようとしていると教えられた。



長田区の天使

C組 茂原 健夫

調査活動では、一番被害が大きかった長田区を目の前にした。そこは、阪神大震災から2年以上もたっているというのに、道路はじゃりでもともじゃなく、家はつぶれたあとで、たくさんの空き地が目につく状況である。そんな状況の中僕達を温かく迎えてくれたのは、震災で家を失い現在は仮設住宅に住みながらも、長田区のリーダーとして活躍されている福田道夫さんである。

福田さんは、テレビや新聞で表面的にしか知らない僕達に少しでも「人々の心の傷」を分かってもらおうと知識の乏しい僕達に一生懸命に語ってくれた。自分自身がすごい被害をうけているのにもかかわらず……。

「建物の被害より、心の傷が一番恐ろしい。」そう言って僕達に教えてくれた。その姿は、助けを求めているながらも、なにか自分達で道を開きたいという願いが表われているようにも思えた。僕はこんな福田さんに心をうたれた。

他人に自分の小さな小さな力を分けあたえられる人、その力が、何の為ににならなくても、その行動を僕達の目の前で見せてくれた福田さんがとても大きく強く感じられたのは僕以外の八人の人達も思っただろう。

そして「がんばろう神戸」のジャンパーを着た福田さんは、神戸の街を走り続ける。



入れなかった・・・

C組 吉田 昌平

今回の調査活動は、福井での調査活動とは違い、とても大きな場所で行うことなので、ものすごく不安でした。

しかし、その不安もあり、緊張していたせいか、何度も何度も確認をしたため、電車を間違えることもなく、プロジェクト結ぶに着くことができました。

次に仮設住宅へ結ぶの人といっしょに行きました。しかし、残念なことに「今日は先客がいるから、ちょっと中には入らないでおいてくれるかな。」ということで、仮設住宅に入れなかった。

次の仮設住宅では、「ちょっと今日は体の調子が悪いから悪いけど今日は帰ってくれるかな。」残念ながらもたまたま仮設住宅に入れなかった。

もう仮設住宅での知りあいがいない。
「仕方ないや。でも、少しさんねんだな……。」
とつぶやきながらボソボソと歩く。

しかし、その帰り、ボコッともり上がったテニスコート等数々の爪跡を見ることができた。

少し残念だったが、それはそれでよかった。



調査活動

C組 五十嵐 理紗

私達の班は、「埋め立て地について」というテーマで調査活動を行った。まず、神戸市役所へ行き、埋め立て地の問題点やそこで行われている貿易について調べることにした。係の人が説明して下さった内容には予想もしていなかった事が多く、なるべく地元の人達に迷惑をかけないように、少しでも便利なものが出来るようにと工夫していることが分かった。特に、「削り取った土砂は地下のベルトコンベアで運搬」「何度も地元説明会を開く」という事か印象に残った。しかし、それだけ工夫や苦勞をしているだけに、埋め立て地建設の関係者の方々の期待は大きいそうです。より多くの業者の方に土地を利用してもらい、より大きく埋め立て地を発展させるためにも懸命に知恵を絞っていらっしゃいました。結果的には埋め立て地を「企業の島」としたいらしく、その方は、「うちの課では、道路の整備に力を入れる必要がある。」ともおっしゃっていました。

係の人はどの方ともとても親切で、一つ一つの質問に全部資料を用意して答えて下さいました。本当にすばらしい人達で、人間の鏡だと思いました。しかし、あまりにすばらしすぎたために、次にポートアイランドで質問するはずだった事もすべて分かってしまい、行く必要がなくなったので大幅に予定を変更することになりました。おかげでとても実行力がつき、良い修学旅行になりました。

調査活動を終えて

C組 梅澤 佳乃子



私達の班は、調査活動で西宮プロジェクト結ぶに行った。プロジェクト結ぶには石井さんをはじめとする人達がいて、私達の質問にとても親切に答えてくれた。

西宮プロジェクト結ぶについて学んだ事は、ボランティアっていうのはいろんな種類があり、ボランティアをしようと思ってやっている人や、やっていたらそれがボランティアだったという人がいるという事だった。石井さんは震災直後、家からやっとの思いで出たら一番最初に目に入ったのが家の下じきになっていたおばあさんだったので、助けようとした。それが今思えば石井さんのした最初のボランティアだったらしい。この話を聞いてボランティアをしようと思ってやる事もすごく大切だけど、震災があった時はボランティアなんて思えなかった。こんなみんなが助け合うようになればよいと思った。

仮設住宅を訪問して結局ボランティアはできなかったものの、仮設住宅を見て思った事は、本当に仮設住宅なんだという事だった。それと仮設住宅って寂しい所だと思った。あたりまえかもしれないけれど近所で話し合っている姿がないし、窓にはカーテンがひいてあり、人が住んでいる感じがしなかった。

私は仮設に住んでいる人が近所でみんな仲良く話し合えるようになったらこの寂しさも減るような気がした。

鷹取商店街

C組 大石 香織



私達は、震災の事を調べるために、鷹取商店街に行ってきました。

鷹取は、被害がものすごくあった、長田区の中にあります。私達が行ったときは、もう大分復興が進んでいたみたいで、震災直後の写真をみせてもらおうと、今の風景とは全然ちがいで、ほんとうにグチャグチャで悲惨なものでした。しかし、大分復興したといっても、もとに戻るには、あと5年はかかるそうです。そういえば、街を見歩いたときも、まだ仮設住宅もあるし、仮設のお店もありました。あと紙でつくられた教会にもびっくりしました。焼け残ったキリスト像は、これから鷹取を見守っていくのでしょうか。その教会には、たくさんのボランティアの人たちがいました。そして、みんなで食事をして、食器も洗って、協力してやっているのに、感動しました。私達に色々教えて下さった福田様は震災で家がつぶれ、今は仮設に住んでいるようですが、「仮設に2年も住んでいるといやになりますよ。もう早く帰りたい。」と、本音を語ってくれました。実際、仮設に住んでいて亡くなったお年寄りの半分位は、生活のさびしさが、死因だと聞きました。こんなに大勢の人々を苦しみに追いこんだ地震は、いつ、どこで起こってもおかしくはありません。阪神大震災も突然きたわけです。こんな時のために、私達はいつでも心がまえをしておく必要があるな、と思いました。そして人間はいつでも協力していくことが大切だと感じました。



おばあちゃんとの出会い

C組 田 中 沙 季

「私らねえ、ここの仮設住宅4度目の所なんや。いろいろな仮設、点々としてきてさすがにつらかった。」

衝撃的な一言。私は瞬時身震いをしてしまった。それまで大声でひゃひゃひゃって笑って楽しいお話をしてくれたおばあちゃん……

私は調査活動で仮設住宅に訪問した。その仮設住宅というのは地域型で一人で生活するのにちょっと困難でと思われる人達の集まりらしい。そこでボランティアとしてお年寄り（被災者）の話し相手になったり、コーヒーを出したりした。そこで出会ったのがあのおばあちゃんだった。おばあちゃんは私に様々なお話をしてくれた。おばあちゃんの趣味のことやおばあちゃんの娘さんのこと。どれも私を笑わせてくれるようなこっけいな話ばかり。私はすぐくそのおばあちゃんに親近感をもった。

でも楽しそうに話しをしていたおばあちゃんとは裏腹にそこには数々の苦勞を重ねた姿があるように感じた。明るくふるまってくれたおばあちゃん、しかしその明るさの中にある底知れぬ強さを私は見たような気がする。

私がこの調査活動で学んだこと、知ったこと。これらを今後の生活に生かさなければ私の体験は報われれないと思う。自分ができることそれは些細なことでも良いのだ。今の私に何ができるだろうか。



埋め立て地と神戸

C組 藤 木 彬 代

私達は2日目の調査活動で埋め立て地について調べました。埋め立て地の中でも、神戸港、埋め立て地の未来などについて調べました。

まず、神戸市役所へ行きました。神戸港や埋め立て地について聞いたり、資料をもらったりしました。市役所の方はとても親切でした。今は、ポートアイランド第2期を建設中だそうです。また、近い未来には、神戸空港もできるそうです。神戸空港では、主に国内線を利用する予定だそうです。今より、もっと航空機を使う量が増えると思います。ポートアイランド第2期には、いろいろな会社に土地を使ってもらおうそうです。土地が広くなるので便利になると思います。しかし、市役所の人の話では、埋め立て地だから、地震などの災害が大きいということもあるそうです。まだまだ問題点が多いそうだけど、安全性の高い埋め立て地を使ってほしいと思います。

次に、市役所の人の紹介により、海洋博物館に行きました。海洋博物館には、埋め立て地ができるまでの流れをくわしく説明していました。地下を通して上を運ぶので、静かなのだそうです。でも、地下のベルトコンベアーを作るのが大変だと思いました。

市役所の人があまりにもたくさん教えてくれたので、中身のこい調査活動ができたと思います。楽しかったです。



向上心の行方

C組 中村文美

私が神戸に行って一体何ができるというのだろうか。修学旅行の行き先が決定したとき、このことばかりが頭をよぎっていた。だから、何となく調査活動に消極的になりがちで、日に日に嫌だという気持ちが高まってきていた。

ちょうどその頃、調査活動で菅原市場とのアポイントメントをとろうと思っていたが、電話番号がわからず、とれていなかった。私は、こんな気持ちのままではいけないと思う反面、自分の考えが変わらないことにどこにもぶつけられないいらだちを感じ、それを文として表すことにした。

「阪神大震災で家族や友人を失った方も多くいらっしゃるのに、それを思いおこさせるようなことをするのは悪いというような気持ちだが、私にふんばりを与えまいとしている。本当に活動をしてもいいのだろうか……。」

先生の答えはみなさんは以前よりも力強く生きているのではないかということだった。報道では笑顔に満ちあふれた人や行動をおこしている姿が映し出されているが、その一方で仮設住宅や区画整理等の問題が浮き彫りになっている。でも、過去を見つめていても、様々な思いが募るだけで進展がない。けれども、まだ見えていないもの、わからないものに向かっていく方が幾通りにも道がひらけていくのではないか、という自分の決意がかなり私の心の中の軍配を動かしたのだと思う。それからの私は、調査活動することで、自分のまわりにあるもやもやとしたものを取り払おうとしていた気がする。そんな気持ちのまま、やがて私は神戸の地に踏み入っていた。

いくら事前に調べていても、不安はあった。ちゃんとたどり着くのだろうか。私の不安は当たった。道を全く逆の方向に進もうとしていた。新長田駅には写真で見た、壊れはてた姿はなかった。多少の更地はあるもののほとんど目立つ地震のあとではなかった。菅原市場のみなさんも本当に優しく、これから資金の返済などの問題はあるようだが強くてたくましいという印象を与えられた。つらくて悲しいこと、それが震災。というのは私の思いこみだったのかもしれない。一步一步踏みしめた大地に響く音が自分のもとにはね返って生きていくための原動力になる。他の人から言葉や物質をもらってすぐに感謝できるのだろう。自分がしっかりしないと、自分もまわりもだめになってしまうということが分かっていたのだと思う。

平成8年4月にそごう神戸店は生まれかわって開店した。同じ震災を経験したということが、心からのサービスにつながっているといえるようだ。三宮駅から一步外へ出れば、明るく澄んだ建物が目に入る。たしかに神戸の顔ともいえる。いかにも、前向きな感じが伝わる。商業というのは原点に戻れば、人と人とのつながりなのだと思う。思いやりや分かち合いということが最も大切な要素だと思う。

復興は、元に戻ることでなく、それ以上になること。神戸の方々はそうしようと励まれている。ところで私はどうなのだろう。くだらないことで一喜一憂して、生きるということを深く考えていない。まして、向上心なんてかけらもない。こんな私でさえ、神戸の方の思いを感じとってしまったのだから、受け継がなくてはならないのだ。私のために。



布引ハーブ園

C組 藤田 麻奈美

修学旅行の2日目の調査活動で私の班は、“異国の文化にふれてみよう”というテーマで、神戸・北野異人館へ行きました。

大阪のホテルを出て神戸の元町駅に着いて、いよいよ出発して、まずは、フロインド・リーフというパン屋へ行って、昼食を買い、2つの異人館へ行って昼食をとった。その後、もう一つ異人館をまわり、ハーブ園へと続くロープウェー乗り場へと向かいました。ロープウェー乗り場から、乗ったロープウェーは、スキー場で乗るゴンドラととてもよく似ていました。

上には、森のホールや香りの資料館などがありました。資料館には、原料と共に、それから作られた香水や、それを作るための道具も沢山展示してあり、香りが人々の生活にあたえた影響なども書いてありました。それに、四種類ののにおいをかき、どれが好きか、嫌いかで判断する性格診断もありました。

ハーブ園の中に入った時、入り口に無人の入場料入れがありました。そこには、子供料金で入ろうとしている20才ぐらいのカップルがいました。塚田さんが、監視カメラを発見し、おしえてあげると、その人達は、とてもおどろいて、お礼を言っていました。その後も2～3回あって、数回話しもしました。その人達は、とてもいい人達でした。

修学旅行では知らない人と知りあったりもできて楽しかったです。



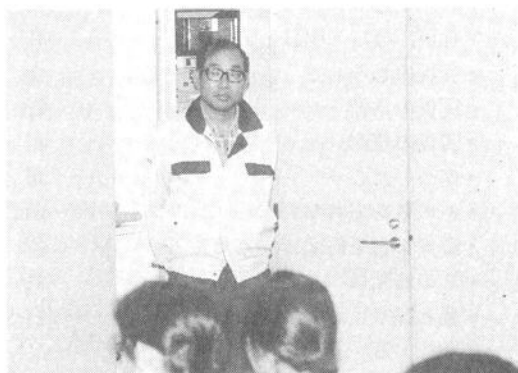
ボランティアの事前指導をして下さる project 1-2 の有光みさん

『私の心に』

震災学習〔体験談をお聞きして〕



講話をして下さった元鷹取中学校長 近藤豊宣氏



調査活動や震災学習を支援して下さいました神生善美氏

・自主・協同～附中の教訓～	坪内理敏	27
・震災学習より	藤田佑平	27
・震災学習と僕	山口貴久	28
・宝	五十嵐陽子	28
・広がる人と人との輪	今村友紀	29
・これからは	小仲谷尚子	30
・人の心は分からない	小竹梓	30
・生きているしあわせ	登谷晶美	31
・震災学習	李越	31
・これからの地震対策	多賀史晃	32
・自分改革	中島広喜	32
・震災後に必要なこと	望貴博	33
・忘れかけていた記憶	清水健史	33
・震災学習	齋門史也	34
・震災の苦しみから復興へ	坪内慶人	34
・本当のボランティア	西尾恵美	35
・神戸への期待	熊崎恵理佳	35
・神戸で学んだこと	幅岸早苗	36
・ボランティアを考える	加藤有希子	36
・震災学習を通して	酒井麻友子	37
・震災学習	長谷部やよい	37
・あの時の悲しみ	池田雅史	38
・自分を見つめて	木村崇	38
・偶然を必然にすること	朝倉大貴	39
・神戸、今日・明日・未来へ	高瀬直人	40
・震災の恐ろしさ	土田貴史	41
・震災の学習	野条泰永	41
・震災の悲劇	富士真	42
・傷ついた心	藤井敬也	42
・あの日を忘れない	山本齊	43
・震災学習を終えて学んだこと	片岡千寿枝	43
・その時私は	酒井理恵	44
・悪と闘う正義の味方	白崎祐子	45
・知る	高田祐紀代	45
・地震と人間の強さ	塚田真奈	46
・震災学習を通して	宮越久恵	46

自主・協同～附中の教訓～

A組 坪内理敏



僕は、震災学習で聞いた鷹取中学校の元校長先生のお話しがとても心に残っているので、その話から得たことについて書いてみた。

震災が起こった時、たくさんの人が鷹取中学校に非難してきたらしい。その数は後に4000人近くにのぼったらしく、その時4000人も非難者をまとめたのは、中学校の先生、生徒であった。4000人もの人を少人数でまとめるのだから、1人1人が忙しく、ねこの手も借りたいくらいであったらしい。つまり、生徒は先生に何をすればいいのかなんて聞いてられない状態であった。そのため生徒は、自分達は是非難者に何をすべきなのか、何ができるのかを考えて行動していたのだ。こんな自主的な行動は、そう簡単にできる事ではない。

また、4000人もの人をまとめるのだから、自主的にやっても、できない面がある。それをカバーしたのが彼らの協力性だと思う。その協力性というのは、生徒同志だけでなく、生徒・先生・非難者それぞれが協力したらしい。そのパワーは、金もうけの事にしか頭になくいだらない集団なんかとは、月とスッポンくらいの差があると思う。

結局、僕が学んだことは、仕事を自分で見つけるという自主と、その重要さ、それと、みんなが一貫となって1つのことを目指すという協力性とその重要さであったのと思う。

震災学習より

A組 藤田侑平



震災学習で眠っていたものには、遊園地のチケットを渡さない、なんてとんでもない——。

この“とんでもない”というのは、批判的な意味で言ったのではない。震災学習が始まる前までは、僕も眠る人が出てくるだろうとは思っていた。椅子の座り心地が悪い訳ではない。机がなかったため、眠れなかった訳でもない。唯、おもしろかっただけである。しかし、おもしろかったで終わらせるのは、非常におかしい。そのためにここにこれを書いたのである。

とにかく、あの学習を終えた直後、僕が考えたのは、自分がなんらかの形で被害を受け、大ケガにあったとき、自分と同じように懸命に生きている人に対して、何をしてあげられたか、という事だった。それは、もちろん助けてあげたいと思った。それは以前と変わらない考えである。しかし、実際にその経験をした人の話を聞くと、自分にはできないと考えた。唯一できることは自分の身を守ること、それだけである。しかし、運が悪ければ守りたくてもできないこととなったのが阪神大震災である。その中で生まれた「ボランティア」という考え、今、僕たちが必要であると呼びかけているものとは全く違うものであった。この時、眠っていたら後悔していただろう。

一度聞いたら目を閉じることができない話だったといえる。

震災学習と僕



A組 山口 貴久

自分はこの修学旅行で震災実行委員として福井の震災を調べました。始めはどうか迷ったけれども、自分達の住んでいる所なので調べてみようと思いました。

最初は人に任せてもいたけれど、だんだん自覚を持ってきて、進んで調べていくようになりました。調べが進むうちに福井大震災の被害のひどさというのが分かってきました。こんなひどいことを祖父や祖母が体験していたと思うと、恐ろしくなってきます。

修学旅行の当日がやってきました。僕らの調べたことを発表し、次に鷹取中学校の本校長先生に話を聞くことができた。その先生の話によると、先生方は自分達も被災したにもかかわらず、ボランティアとしていろんな人達を助けていたそうだ。また生徒達も一生懸命働いてくれて、そこで学んだことを一生忘れないだろうとおっしゃっていました。

また自分達が福井の震災について調べていた分もあって神戸の震災について比較することができました。

今鷹取中学校は、被災者が全員出ていき、正常な授業をしています。当初はまだこの状態じゃ授業はできないだろうと言われていました。しかし生徒が被災者を理解して仲良くなるにつれて、悪いと思って学校をでていってくれたそうです。まさにすばらしい人間関係だと思います。



宝

A組 五十嵐 陽子

「宝や。生徒や先生達は宝や思いましたね。」

鷹取中学校の元校長先生である、近藤先生はそうおっしゃって下さった。鷹取中学校とは、震災の被害を大きく受けた場所にあり、避難者の数は最高で4000人以上にも達したそうだ。そこの生徒達や先生達は自分の事で精一杯なのにも拘わらず、負傷者の手当やお年寄りのお世話など文句1つ言わずにやってくれた。

阪神、淡路大震災はとても大きな被害をもたらした。それは、死者、負傷者の数など資料を見ても分かるが、近藤先生のお話を聞いてそのことを生々しく実感した。体中血だらけの負傷者の人々や友人の死、周りでは目を逸らさずにはいられない事ばかりの中で、神戸の人々は生きていることが地獄のように感じたのかもしれない。そんな中で、人々を助け、励まし、勇気を送り続けた私と同じ歳の鷹取中学校の人達を尊敬したい。地震はたくさんの人々を悲しませ、悩ませ、苦しめてきた。今でも、仮設住宅で苦しい生活を送っているお年寄りの方々など、完全に復興したわけではない。しかし、神戸の町は着実に生まれ変わっている。地震に対応する建物が次々と建てられ、日本で一番地震に強い場所となっているんだと思う。

地震が神戸にもたらしたものは、マイナスな物だけだろうか。そんなはずはない。神戸の人々は痛みを味わうとともに、他の県の人には味わえない、かけがえのない宝を手に入れたのではないだろうか。



広がる人と人との輪

A組 今村友紀

忘れもしないあの日。2年前の1月17日に大震災が神戸を襲った。その日から始まった神戸の人々の苦しい生活、そしてそれを支えた中学校の生徒達の温かい心から、私達附中生も何か得ることはできないかと三宮にあるフェニックスプラザへと向かった。

まずは私達の代表が福井大震災の発表をした。福井大震災も阪神大震災と同じくらいに大きな地震である。しかし福井大震災は水害にもみまわれたことが大きな特徴である。福井大震災は50年ほど昔のことなので、私達はもちろん、生まれていない。それに比べて阪神大震災は、2年前の事なので記憶に新しい。私達の住む福井市も震度4の強い揺れを感じたが、震度7という想像を絶する揺れに襲われた神戸の町では復興に向けて、どの様な事が行われたのだろうか。

福井震災の発表が終わり、次に鷹取中学校の震災当時に校長先生をしていたらしい人の話を聞いた。その話は、驚くことでいっぱいだった。先生方は自分の家も大変なのに、学校へ避難されてきた人々の対応にあたるため、ある程度自分の後始末が終わると学校に来てくれたそうだ。それも驚くことの一つだが、最もすばらしい事だと思ったのは生徒の話だ。鷹取中学校の生徒達は、だれがやれと言ったわけでもないのに、自ら進んで先生方にまじり避難してきた人の対応にあたった。このような話の中で一つ、私の心に何か強いものを残していった話がある。これは、ある登校拒否の生徒の話である。この生徒は、人前で話すのが苦手で内気な性格だった。教室という場所が怖く、そのため登校拒否になってしまったのである。しかし、あの震災が彼女を変えた。彼女は自分で、自分が今困っている人のためにできる事を見つけたのである。その事とは、手の不自由なおばあさんの食事の世話である。彼女は数少ないお弁当の中からおばあさんの分を確保するために、内気な性格を脱ぎ捨てていろんな人に理解を求めた。そして、そうして得たお弁当をやわらかく煮直して、おばあさんに食べさせてあげたのである。

たくさんの大きな試練の中で、人は大きく成長する。それは今までの人生で決まってきた人格さえも変えてしまう。こう言うとか悪いことのようなのだが、さっきの話を思い出してみると、私はよりよい自分に成長するためのきっかけとして、震災は人々の心に助け合うことの大切さを残していったような気がする。

鷹取中学校のある男子生徒が言っていた言葉がある。ボランティアとは、自分ができることをやるだけのこと。だから当たり前の事であって、すごいことでもなんでもない。私はこの言葉を聞いて、今まであまりボランティア活動に積極的ではなかった自分が恥ずかしくなった。今の自分にできることがもっとあってもいいはずだ。そして今、鷹取中学校の生徒のそんな強い心を知った私は、きっと変われるという心を持って行動すれば何でもできるような気がしてきた。

私がこの修学旅行で得たことはたくさんある。そしてこの震災学習で得たことはとても大きいと思う。震災は、人々の心に深い傷跡を残したものだとは私は今まで思っていた。たしかに被災した人々の心には深い傷跡が残っていると思う。しかし、必ずしもそれだけではなかったと私は思う。人々が助け合うことのできる大切さや、人はひとりでは生きていけないといったはかなさを知ることができたと思う。



これからは……

A組 小仲谷 尚子

修学旅行の2日目は、班ごとに調査活動を行いました。私達の班は建築関係の事から震災前後の建物の変化などを調べました。話を聞かせてもらった人は、みんなとても親切で、いいばかりでしたが、私がとても印象に残っているのは、3日目の震災学習です。

鷹取中学校の元校長先生が、震災の時の学校の様子や生徒の事を話してくれました。

校訓は自主協同。私は今までどんな事をしてきたか？・ボランティアとは何か？・一人の女の子の話を聞きました。

「ズキッ」

今まで私が思っていたボランティアへの考え、とてもはずかしく思いました。ボランティアは自分ができる事を見つけ、それを一生懸命やる女の子はすごいなと思いました。自分の考えを人に知ってもらい、人を説得する。

私はこれからどうすればいいのか？何をすればいいのか？この話を聞いて考えさせられる事がたくさんありました。自分にできること、これだったら私にもできる、という何かを見つけていきたいです。そして、人に喜ばれることを。女の子を見習いたいです。もっと積極的に、自主的に行動していきたいです。

調査活動、震災学習など、私にとってとても心に残る修学旅行でした。



人の心は分らない

A組 小 竹 梓

修学旅行までにある程度の知識はあったけど、実際に亡くなった方々の状況やご家族の心のうちは全く理解できなかった。

拜啓 近藤先生

先日、かけがえのない苦い体験をお話しして下さってどうもありがとうございます。私はある程度、阪神大震災の知識はあったのですが、イマイチ理解できなかったことがありました。それは実際に被害にあわれた沢山の人の心です。どのくらい怖かったのか、どのくらいの絶望感に埋もれたのか、どんな目標を持って立ち上がったのか。先生のお話を聞いているとき何度も何度も「この人達は自分を失ってしまったのではないか、どうして立ち直ることができたのだろうか」と思いました。その中で、先生のお話を聞き続けると先生は、こうおっしゃいました。「生徒が自分でできることを見つけていった。」と。私はこの時、本当に驚きました。「そんな状況にっているのに、自分のことだけでなく、他人のことまで面倒見れるのか。」きっとこれは、私が今思うに、このような場合に直面すると自分の恐怖やどうしようもなさから気を紛らわす為に自分を捨てて他人のためになりたくなるのでしょうか。どうしようもないという状況は何とも言えない恐怖、絶望なのでしょう。先生のお話やお顔から状況を理解したつもりですが、やはり人の心ばかりはその場合にあわないと神様でも分かりませんね。それでは、お体にお気をつけて。

敬 具



生きているしあわせ

A組 登谷晶美

「私は生きている」と考えてみたことはなかった。それは当然の事だと思っていた。「死」という文字も見かけることもなかったから。

修学旅行の最終日、フェニックスプラザで震災学習をしました。そして講師の先生から震災直後の生々しい状況を説明してもらいました。沢山の人の死、残された人々の苦しい生活を。私にはまだそのときの気持ちがわからない。分かりたくないと思った。目の前で友達に火の中で死んでいく所を想像できなかったし、考えることもできませんでした。

学んだことは沢山あり、考えさせられる所もありました。人間の命は自然に勝つことはできないこと、しかし人間は助け合うことでどんな困難にも立ち向かえられる、とても大きな力を持っていること。人間（ヒト）とは、本当に自然に勝てないのだろうか？勝てる方法はないのか？

震災は多分、多くの人々に大きな発見を与え、そして恐怖を与えたと思います。もちろん、私にも与えられました。そして私は阪神大震災（多くの人の死）で学び得た、助け合う心、勇気を生かしていきたいと思います。

今も2年前の悲しみは残っているけれど、人々の笑顔は少しずつ増えていきます。あの大きな出来事を越えて。私の修学旅行で得たもの、それは生き（生きている）幸せです。



震災学習

B組 李越

修学旅行の3日目にあたる3月15日、僕たちは、神戸市内にあるフェニックスプラザに行った。そこでたかとり中学校の震災当時の校長先生にお話を聞いた。

つぶれた家に足をはさまれ、動けずに家に火がまわってきて、焼け死んだ人、もうすでに死んでしまっている孫をおぶって、自分は血まみれになりながらも、

「この子だけは助けてやってくれ。私はどうでもいいんじや。とにかくこの子だけは助けてやってくれ。」

と言っていたという老人。自ら家族を守って機械にはさまれ、

「はやく逃げろ。」

と家族に告げたまま、無念の死をとげた父。

ものすごく生々しいものばかりだった。福井震災でもこのようなとても悲しい出来事が各地で数多くあったと思う。

地震は、いつおきるかわからない。しかし、このように、実際に震災にあっているいろいろな場面を見て、体験している人たちに話を聞いて、地震という自然の脅威に対する知識を深め、日ごろから、いつ地震がきても、対処できるように用意しておくべきである。とにかくそのためには、福大附属中の2学年の生徒だけでなく、日本全国、世界全ての人間に、震災経験者から、知識を分け与えてもらうことが重要であると思う。



これからの地震対策

B組 多賀 史 晃

修学旅行の3日目の午前中、僕たちは震災学習をしました。鷹取中学校の元校長を講師としてお迎えして、お話を聞きました。このお話を聞いて震災についていろいろなことがわかりました。福井大震災と阪神大震災では、どちらが大きな地震だったのかということなどがわかりました。

福井大震災の震度は7.2、阪神大震災の震度は7で、福井大震災の方が震度は強いのに、阪神大震災の方が死者が多く出ている。しかも、福井大震災の方が昔に起きているので、阪神大震災の方が建物が安全に作られているはずだ。しかし、阪神大震災の方が死者が多く出ているのはなぜなのだろうか。

僕達が修学旅行からかえって、来て次の日に福井で震度3の地震があった。僕は、この震度3の地震でも驚いていたのに、福井大震災と阪神大震災では震度7以上を記録している。このことから、この2つの地震の恐ろしさがわかる。今からは、安全性を考えた建物を造り、大地震が起きてもあまり死者を出さないようにするべきだ。

最後にボランティアについての事が分かった。ボランティアというのは、ボランティアをしてもらう人のためにやるのではなく、自分のためにやるものなのだとことが分かった。この震災学習はとてもためになった。



自分改革

B組 中 島 広 喜

'95、冬、神戸。その震え上がるような寒空の下、阪神大震災がむき出しにしたキバが、多くの悲劇を生んだ。

その神戸で、僕は震災学習をすることになった。講師の方の一言一言が僕の全然知らないことであった。激しい地震だった、多くの死者が出た、二次災害があった、などは知っていた。だが、中学生が自主的にボランティアをした、などは全く知らなかった。仕事というと、給料をもらうために働くのが仕事だと思われるかも知れないが、本当の意味での仕事は、僕は違うと思う。給料をめあてにせず、人のためにつくすのが、人間としての本来の仕事ではなからうか。だから本来、ボランティアという言葉は必要ないのではないか。このことを神戸の中学生達は実行していた。分かっているにもかかわらずできないこと。ただでさえ自分もヤバイ状態なのに、人のことまで……。そう考えると、自分は今まで何をやっていたのだろうか。自分は何ともしないのにボランティアを何かしていたのだろうか。おそらく、「ボランティアをして何を思いましたか？」と問われても、即答できないであろう。

この修学旅行は、自分を見つめ直す機会を与えてくれた。でも、形式ばったボランティアをする気はない。人の目に見えない所で、社会に貢献したい。自分史録の下での力持ちでよいことがよく分かった。



震災後に必要なこと

B組 望 貴 博

福井では昔、大被害をこうむった福井大震災という惨劇があった。今ではもう復興したが、今でもこの福井大震災と同じ惨劇にあって、まだ復興していない所があることを改めて知った。

震災直後のだいたいのことは、TVや新聞によって多くの人に知られているが、その中に、報道されなかった悲惨な出来事を震災学習によって知ることになった。

この話をして下さったのは、鷹取中学校元校長先生だった。震災直後、鷹取中学校は最も大きな被災地であった。鷹取中学校では、この地震にあって自分達より苦しい人達がいるんだと思った人がいて、その思いが学校全体に広がった。自分の家の人が全員無事だという人が、その家の片付けをほうりだして、自分よりも苦しい人達を助ける生徒、先生も一丸となって、行動し始めたのだ。やはり、その人たちはすごいと思った。自分を犠牲にして苦しい人を助けたという考えにすごいとただだと思った。こういうすばらしいこともあったが、中には言えなどに押しつぶされてしまった肉親、友人などを亡くしてしまった人も多い。こういう悲惨なできごとを、作り出してしまふ地震。こういう自然災害は誰の手でも止められないことである。だから、地震により家や肉親や友人を亡くしてしまった人がいるので、鷹取中学校の生徒のように、こういった人の心を支えるボランティアの人は必要であると思う。



忘れかけていた記憶

B組 清 水 健 史

2年前に起こった阪神大震災。起こった時はいろいろと騒がれていたが、2年たった今、阪神大震災の記憶など、頭の隅にもなかった。

しかし、このままではだめだ。そう考えさせてくれたのが、今回の修学旅行であり、震災学習だった。特に僕達が住んでいる福井では、以前にも福井大震災が起り、人々を苦しめているので、これからの未来で同じようなことを繰り返さないためにも、有意義なものとなった。

人間の心なんて移りやすいもので、おもしろい方・興味深い方へ傾いてしまう。結局自分の心にいつまでも残っている人は、直接被害にあった人のみになってしまう。話をしてくれた先生も、中学校の生徒は地震を通してすごく成長していったと言っていた。でも、直接関わっていない僕達は何が変わっただろうか。何も変わっていない。それではいけないと思う。わざわざボランティアには行かなくとも、震災についていつまでも心にしまっておく。自分は今、何かできることはないかと考える。そういうふうの一部の人の被害を日本全員の被害として受け止めて行くべきじゃないかと思う。

そういうことに気づけたのも震災学習をやったの結果だから、僕は震災学習をしてよかった。これから、「関係ないや!」といって、人ごとに思わずに、「自分は何かできないか」ということを考えて行動したい。



震災学習

B組 齋 門 史 也

震災学習では、当時神戸の中学の校長先生をしていた近藤先生の話聞いた。

平成7年(1995年)、1月17日、火曜日、午前5時46分、阪神・淡路大震災は、神戸の町の姿を瞬時にして変えてしまった。この震災で、町は壊滅状態に陥り、死者約5480人、負傷者24900人、家屋の消失、746棟をだし、多くのものが失われた。規模、マグニチュード7.2、地震の被害は、震源地から円心状に広がり、弱くなるはずの常識が通用しなかった。

しかし、人々は多くのものを得た。これまで学校が地域社会共通の財産であるということは、理念として理解されてはいても、実際、教職員や生徒は地域社会と結び付く機会、ほとんどなかったという面がある。しかし、被災地の教職員と生徒が突如襲った大震災に真正面から取り組み、学校に避難してきた市民を温かく受け入れ、行政各機関の支援も満足でない緊迫した状況の中で、見事に避難所として学校の運営ををしていたそうだ。生徒達は、自分でできることを自分で探してやったそうだ。避難所の中では、外国人が差別されたが、教員、生徒達は、この外国人たちに一番最初に物資を渡したり、差別をなくそうと呼びかけをしたり、話し相手になってあげたりして、差別をなくしたそうだ。

僕は、この人達のように、他人の気持ちが分かる人になりたい。



震災の苦しみから復興へ

B組 坪 内 慶 人

神戸を中心とした地震は、多数の死傷者を出し、産業などにも大きな被害をもたらした。それからもう1年以上すぎた。神戸の町並みは何もなかったようにきれいになっていた。しかし、いまだ仮設住宅でくらしている人達もいる。そういった人達は、まだ家を見通しもなく我慢しているのだろう。始めは町中でも、仮設住宅を見かけたが、修学旅行で見かけたのは、ポートアイランドの人通りの少ないところにしか見あたらない。震災直後はいろいろな人々がボランティアをしに神戸へ向かった。今でも募金や会社で義援金が送られている。こういった人々のおかげで、神戸もこんなに早く復興を遂げたのだろう。今だからこそ、神戸の震災のことは、その日にうちにすぐ全国に知れ渡り、ボランティアの人々もいち早く現場に行けたが、福井震災の時は、救援物資などがくるのが非常に遅かったと祖父は言っている。そして現在の建物は、鉄筋のコンクリートの建物で時間は朝だからよかったが、福井震災のころはまだ木造建築で、夕方で夕食を作る時間帯だったので神戸以上のすごさがあったと思う。このようなことで、修学旅行では神戸の目覚ましい発展とともに人々の苦労も、調査活動・震災学習とともに、味わった。当然だが、日頃から少しでも意識して行動していれば、大被害を最小限におさえられるのではないかと思う。



本当のボランティア

B組 西尾 恵美

震災学習は、私にとってよい経験となりました。実際、震災にあわれた方の生の声を聞けたからです。新聞や、ニュース等で、阪神大震災のことは、知っているつもりでした。しかし、知っているとはいっても、自分の震災といえるような大きな地震を体験したことはありません。報道の裏では、たくさんの人達の努力が隠されていることを知りました。

私は、この学習を通して、得たものがたくさんあります。その一つがボランティアについてのことです。私達は学校で、何度も繰り返してボランティアについての話し合いをしてきました。それに、何度かボランティア活動をやってきました。私は、ボランティアとは何か、いまいっつかめてはいませんでした。しかし、近藤さんのお話を聞いて、なんとなくではあるけれど、分かりました。というより、気づかされました。一番印象に残ったのが、自分にできることを自分で見つけて、自分で実行するというお話です。これがボランティアだと思いました。私達がやってきたボランティアというのは、形ばかりではないでしょうか。いくら話し合ってたって、頭で理解したって、何にもならないと思います。実際に、自分が見つけられるような場になれば、自然に行動ができるはずです。そのきっかけとなるものがないだけではないかと思います。震災学習で学んだことを生かして、3年につなげたいと思います。



神戸への期待

B組 熊崎 恵理佳

私はこの学習で2つの事を学びました。1つは、勉強は自分が将来つきたい職業のために勉強するということ。もう1つは、ボランティアは「してあげる」という気持ちでやるのではなくて、自分から進んで「したい」という気持ちからするものであること。この2つの事を学んだのであった。私達は、福井大震災のことを少し調べて修学旅行へ行行った。調査活動などでも福井震災との比較として神戸大震災について調べに行った。私達の調べたところは、かつてのつらい想いを思い出し、泣かれてしまう人もいた。それほどこの震災で失ってしまった親せき、友達などは大変かけがえのない人であること。別に悪いことをした理由でもないし、病気でもないのに死んでしまった人。自然の脅威で死んでしまった。これほどまでに「自然」の恐ろしさを教えられたことはなかったであろう。私達も今回の学習で、高島中学校の元校長先生から聞いた、本当に残酷なお話は自然の脅威について改めて考えさせられるものであったと私は思った。私達が、ふだんテレビなどで見ている震災の現状について放送されているのは本当に一部であることが分かった。マスコミとかは本当に全部を私達にテレビを通して伝えているのではないということになる。私達はボランティアを通して、もっと現実を見つめていかなければならないと今回のことからつくづく思った。これからも美しい神戸を取り戻すために頑張ってほしいと思います。



神戸で学んだこと

B組 幅 岸 早 苗

今回の修学旅行で一番に残ったのが震災学習である。2年前にあった阪神大震災がこれほどひどく、悲しいものだったとは、私は思わなかった。私達の福井でも大きな地震があったが、神戸での地震は便利になったはずの今の世の中に疑問をもたせることになった。この都市での地震では大きな被害を出し、たくさんの人の心に大きな傷をつけた。私は報道されていた以上にこの地震は大きな被害を与えたのだと思った。でも、そんな中で私はとても強い神戸の人達の話聞いた。自分自身も地震の被害を受けたのに、たくさんの人のためにボランティアをする人達だ。最大の避難場所となったある中学校では、私と同じくらいの生徒さん達が自分自身も被災したにもかかわらず、たくさんの人達のためらボランティアをしたそうです。誰1人として文句を言わずに。この話を聞いたときは、とても感動しました。そして神戸の人達の強さを知りました。

あの震災から早くも2年がたちました。今の神戸の夜景を見ても、この地にあんなに大きな地震があったのかと思うほど、神戸は復興してきています。でも、ここまでくるまでに報道されていないたくさんの苦労があったと思います。また、たくさんの悲しみを乗り越えてきた人々の姿があったと思います。

神戸の街並みや全ての人々が元の生活に戻れる日は近いと思います。がんばれ、神戸。



ボランティアを考える

B組 加 藤 有 希 子

3日目の午前中に、講師の先生のお話を聞いた。その講師の先生は、元たかり中学校の校長であり、阪神大震災の時に、中学校の先生と生徒達が、学校へ避難した人々にどのようなボランティアをしたのか。そして、その当時の被災者の方々はどのような暮らしをしているのかななどを、実際に震災にあった日との生の人の聞くことが

できた。50分程の講演だったが、私にとっては1つ1つが感動と驚きの連続だった。

まず、私が感動したのは、生徒や先生たちのボランティア活動に励む姿だ。自分たちも被災者なのに関わらず、学校へ避難してきた人々へ誠意をもってお世話をしていたのだそうだ。その上、学校は神戸で一番規模が大きい避難所だった。だから、授業を再開するのに時間もかかり、ましてや、学校が生徒達のものになったのは、阪神大震災から7カ月半後のことだったらしい。自分たちもつらい立場にあるのに、何も文句を言わず、人のためにつくせる精神の強さはすばらしいと思う。

先生は“ボランティアは、自分のできることを探して、それを実行に移せたことだ”とおっしゃっていた。執行部のボランティア活動の中で、自分のできることを探していきたいと思う。それができれば、本当の意味のボランティアにたどり着けるだろう。また、人間の強さをも手に入れられる。



震災学習を通して

B組 酒井 麻友子

今まで、阪神大震災についてのビデオは何回か見たけれど、実際神戸に行き、生の声を聞いた方がはるかに胸に残る物が多かった。話の中で一番心に残った物は、生徒達のボランティア活動のことでした。自分たちも被害にあったのに、学校に非難してきた人達のために何ができるかを考え、それを実行したのに対しては、ただ「すごい」の一言でした。中でも、静かな女の子が1人のおばあさんのためにお弁当を確保するという話には驚きました。自分の事だけで精一杯だ、という気持ちは彼女には少しもなく、おばあさんためにできることをやってあげよう、という気持ちがひしひしと伝わってきました。

人のために何かをするということは、すごく難しいと思っていました。でもそれは、他人を思いやることで自然にできるものだと感じました。神戸の人達はいつもお互いを思いやっているのだな、と思いました。阪神大震災を通して、神戸の人達が学んだもの、それは他人を思いやることの大切さ、すばらしさと希望。他人のことを常に考えられる優しさ、大規模な地震には負けないだけの強さだと思います。これらのものを学んだ神戸の大規模な地震に負けないだけの強さだと思います。これらのものを学んだ神戸の人々は本当にすばらしいと思います。そして私が震災学習で学んだもの、それは本当の優しさと希望のすばらしさ。震災学習を通して、私が得たものは、とてつもなく大きいものなのです。



震災学習

B組 長谷部 やよい

修学旅行の3日目、私達は元鷹取中学校校長の近藤さんに、阪神大震災の体験談をいただいた。そのお話しの中には、テレビで放映された部分の避難所や街の惨事、被災した人達の心などがもりこまれてあった。そのことによって、私の阪神大震災の知識は増えたわけだが、知らないことはまだある、実際のその現場にいた人達じゃなければ分からないことがまだたくさんある、というのが私の持った感想だった。

そして、近藤さんの話す、鷹取中学校の先生方や生徒達の行動や心境に対する感想はたくさん持った。一番思ったことは、震災によって町並みなども変化したことだろうと思うけれど、一番変化したのは被災者の方々なんだということだった。近藤さんが例に出した女の子で、震災まで登校拒否をしていたその女の子が震災にあって避難所になっている学校に出ていき、自分のやるべきことを自分で見つけた、というようなお話があった。

そのように、震災は、表面上は悪い影響しかあたえていないように見えるけれども、人の心など見えないところでは、よい影響も与えている場面もある、という新しいことを感じた。

実際にこの震災を体験していない私は被災者の方々の傷ついた心が分からないかもしれないけれど、この震災は忘れようとしてはいけないと思う。



あの時の悲しみ

C組 池田雅史

3日目の震災学習の話は、とても地震が怖いものだといっていました。1月17日午前5時46分に地震が神戸を中心に兵庫県全体を襲いました。その地震は、震度7を記録して、神戸の人達に死をもたらしました。ほとんどの人々はタンスの下じきになったり、ガラスで切ったりして死にました。一番被害を受けた場所は長田区の鷹取町というところがひどかったそうです。僕達はそこに行って話を聞いてきたのでとてもひどかったのが分かります。道は今までより広くして車が通れるようにし、家はまだつぶれているところがあり、駅のとおりでは仮設住宅で暮らしていた人がたくさんいました。鷹取町の人達の命を救った場所は鷹取中学校だといっていました。この時の元校長先生・近藤先生に話を聞きました。先生の友人はとても背が高く、170cmあったのが地震の時にになったら35cmになって亡くなったそうです。神戸市での死者は4329人、行方不明者1人、負傷者14679人、家屋の焼失は7061棟だといっていました。地震が起きた時は、誰かがリーダー・シップを取るのだといっていました。誰かがリーダー・シップをとり、みんなに指示をしてみんなを非難させることが大切だと、元校長近藤先生は言っていました。地震でおじいちゃんやおばあちゃんとかが多く死んだと言っていました。僕は被害はあまり受けていないけれど、あの時の阪神大震災で亡くなった人達の悲しみは忘れられません。



自分を見つめて

C組 木村崇

僕は、震災学習で講師の先生にお話を聞いたとき、とても感動しました。それは、鷹取中学校の生徒が被災者の人達を助けたということです。僕は、これを聞いたときとても自分が恥ずかしいなと思いました。それは、三国の重油の油くみを一度も行かなかったからです。そして、もし福井にも地震が起きたら、関東にいる親戚の家に非難すればいいと思っていたからです。こう思っていた僕は、人間のクズだなあと思いました。今はもし地震が起きても、人を助ける事ができると思います。

講師の先生の話聞いて思ったことはもう1つあります。それは、とても人のために働きたくなりました。今一番行きたい国は、アフリカのどこかの国です。それは、そこには大変困っている人達がたくさんいます。だから助けにいきたいです。

今の自分は、怖いものはありません。だから何でもできそうです。僕の将来の夢は、偉い人です。だからアフリカにいて人々を助けて、偉い人になりたいです。でも、僕は根性がないので長続きしないと思います。だから僕は、外国に行って人々を助けるところからいなくて、自分の身の回りの人を助けていきたいと思います。そして、もし震災などが起きたら、ボランティア活動をやりに行きたいです。僕は鷹取中学校の人達は、とてもすごいなあと思いました。



偶然を必然にすること

C組 朝倉大貴

父さん、母さん、ありがとうございます。祖父ちゃん、祖母ちゃん、ありがとうございます。先生、ありがとうございます。友人達よ、ありがとう。今まで私を支え、助けてくれた人達、ありがとう。今まで私に関わってきた全ての人達、ありがとう。

こんな機会でもなければ、なかなか言えないので、最初にお礼を言わせてもらいます。私は時折、生きることの意味について考えることがあります。考えて、まず最初に思うのが、“生きていてよかった”ということです。考えてみれば、今、こうして自分が存在していること自体が、不思議で、すばらしいことに思います。偶然と偶然の組み合わせで、今の私の存在できるのです。しかし、その偶然は、ただの偶然ではないと、最近考えるようになりました。数々の偶然の中で、その偶然を作るべく、努力した人がいたからこそ、それは起こったのです。

「できない」と思うなら、できるわけがありません。「やろう」という意志があって、可能性は生まれるものだと思います。

私が神戸に行って感じたのは、人々の力でした。人々の力、人々の意志。さまざまな意志の中で私が最も強く感じたのは、「やる気」です。感じたというより、これは衝撃にも近いものでした。

阪神大震災が起こり、報道されたもの……。壊れた家、割れたアスファルト、崩れた橋、全てを飲み込む突。そして暗闇、沈黙……。やがて昇る朝日、映し出される人々の顔。ただ、その場に立ちすくむような、覚めない悪夢を見ているような……。やがて人々の中から、少なかった感情が大きくなっていく。そして……。

神戸で私は衝撃を受けました。まず、第1に、思ったよりもずっと復興がすすんでいるように見えたことに驚かされました。その理由の一部を、調査活動で知ったように思います。訪問先の人々から感じられたのは、「やる気」でした。「自分がやらねば」「自分たちがやらねば」という想いが、言葉・表情・態度……それらの全てからひしひしと伝わってきて、私まで厚いものが込み上げてきました。

それを感じ、私自身、すごくうれしかったです。もちろん、それは一部の人々かもしれません。その一部の人々でも、心の中に多くの悲しみをもっていることを忘れてはいけません。ただ、「希望」という言葉が人々の心にあることが、うれしかったです。

頑張っている人達に、「頑張って下さい」の言葉は重荷かもしれません。では、何と云えばいいんでしょうか？

ファイト。私なら、私には、こうとしか言えません。

こんな時、自分の年齢を考えます。たかだか14、5歳の言葉。私の言葉は、まだ軽いです。これから先、私は自分から偶然をおこす人間になりたいです。そして、なりたいたと思ったら、自分のできること、自分史かできないことを見つけ、行動する。自分から起こす偶然。それはある意味で必然という言葉がふさわしいかもしれません。

修学旅行に行けて、私は幸せ者です。えらそうな事をいうと、「まだまだ日本も私たち次第だな」と思いました。何かが起きて、何かを与えられてからじゃなく、自分達が始めること。

お互いに「ファイト」です。最後にもう一度「ありがとう」。



神戸へ、今日・明日・未来へ…

C組 高瀬直人

阪神大震災。1月17日、午前5時46分、神戸の街に悪夢が襲った。神戸の街は数10秒の間に見る目もなくなった。そんな震災から2年。

マスコミや一般会社からは、見離されたような震災だが神戸の人々の心には、まだ、あの恐怖は残っているのだろう。全ての人の心に穏やかな人々が戻るまで、震災を忘れない。忘れてはいけない。

震災学習。最初は学習なんて嫌だな、1時間前に開けてもらう意味があるのか、などと思っていた。しかし、あくまでもつもりだった。福井人震災の話は聞いていても、知っていることばかりだった。ところが、阪神大震災では、ビデオを見ただけでも驚いた。最初の映像だけなら、新聞やテレビなどでも知られていた。しかし、鷹取中学校での被災者の生活を見ていて、ひらめいた。そこには、僕たちの知らない、本当の震災後の生活があった。僕は、全ての人々には、食料が行き渡り、みんな体育館などで、本などを読んでいるのか、と思っていた。しかし、そこにあった映像は、先生や生徒までが一生懸命に水を運んだり、食料（弁当など）を配ったりしていた。一般社会で社会人が働くことと、ほぼ同じくらいに働いていた。とても大変そうだったが、誰一人嫌な顔を見せなかった。そこから、僕の震災学習は終わった。次から次へと出てくる映像に、興味をひかれた。

ビデオもいよいよ終わりに近づいた。最後に、生徒の言葉があった。とてもすばらしかった。生徒の言葉は、僕の考え方を大きく変えてくれた。僕は、ボランティアは僕には無理だ、ただそう思っていた。ところが、彼は「自分にできるボランティアを探してやった。」と言った。僕は自分自身を責めた。テレビに出てくるようなものだけがボランティアじゃない。何もできない、じゃなくて、何ができるだろうと考える必要があったのではないかと、思った。彼らは、僕らとはほぼ同じ歳である。なのに、彼らにできて僕にできないわけがない、と思った。「死んだ人の分まで生きたい。」僕は、自分1人分も生きているのかと考えさせられた。彼らは、震災にあったばかりなのに何人分も生きようとしている。これは、多分彼らだから、震災がどのようなものか分かっているからできるのだろうと思った。後で鷹取中学校の元校長・近藤先生にお話しをうかがった。震災があったからこそ、生徒達が協力できた、と震災でもいいこともあったと言ってくれた。でも、やっぱり震災は嫌なものと言っていました。先生と同時に鷹取中学校に行くはずだった先生が亡くなったからです。そして、先生は、「勇気を、いきなり大きな勇気はもてないから、小さな勇気を少しずつもって行動しよう。」と言われました。今まで何人の陽とからも同じような言葉を聞いたけれど、今回は、特に強く心に残ったような気がします。話を聞いていただけのような震災学習だったけれど、僕の心には、震災が強く大きなものとして残りました。今日にも、その震災は僕に何かを与えて続けていると思います。未来への神戸からのメッセージを伝えていくのも僕たちの使命でしょう。明日へ、今の神戸を伝えていくのも、僕たちの使命でしょう。



震災の恐しさ

C組 土田 貴史

震災学習をすると聞いたときは、とても嫌だった。神戸に行くからといって震災のことばかりするのは、嫌だったからだ。だから震災学習で、元鷹取中学校校長の近藤さんの話を聞いているときは、始めは

すぐ寝てしまうのではないかと思ったが、

とても集中して話を聞いていた。今までのテレビのニュースでは何度も阪神大震災のことを聞いてどんな状況かは分かっているつもりだったが、実際に被災者の方の話を聞いていると、テレビでは言わない細かいこともよくわかった。

とくに心に残った話は、鷹取中学校の生徒が避難者を助けてあげて、自分の学校に7か月もたくさんの避難者が学校にいて、自分たちはほとんど勉強もできないし、体育館や校庭で自由に遊ぶこともできないので、とてもイライラしてしまうと思うけれど、鷹取中学校の生徒は何も文句はわずに手伝うと言うのがとてもすごいと思った。もし、福井にもう一度、大きな地震が起って自分の中学校が避難所になり、たくさんの人が来たら鷹取中学校の生徒のように接することはできないと思う。

最初、全体に嫌だと思ったのが信じられないぐらいに、近藤さんの話を聞いていた。やはり、被災者の人の話はとても大変さが伝わってくるし、生々しいので自分もその場にいるような感じがしてとても役に立った。



震災の学習

C組 野条 泰永

もう2年も前、阪神地方を襲った地震は死者5000人以上をだす大災害となりました。今でも覚えているのが、テレビで毎日神戸などの都市の中継を行っていて、その地震のすごさにびっくりしていたことです。崩れ落ちた家や、一面の焼け野原はとても印象が強く、ボランティアや募金はとても集まって、連日それをテレビは伝えていました。でも裏では、どんな苦労があったのか知りません。僕は、ニュースでボランティアの人を見て、「神戸の人は大丈夫だな」と思い深く考えていませんでした。そして今回の震災学習で深く考えてみることにしました。

今回の講師の方は震災同時一番避難者の集まった鷹取中学校の当時の校長の方で、苦労をつんだ顔をしていました。

話の内容というのは三階建ての家が二階建になって二階になったことや、家が全壊して火がついて救助が遅れて亡くなったなど、むごいものから登校拒否だった生徒が1人のおばあさんをために毎日お弁当を確保してあげたことや家族というものののかたい結束について語ってくれたものもあり、人間同士の中というものは、そして1人の人間の持つ力というのは、とても大きく強いものだ、この学習を通じて強く感じました。また、何千人もの人をまとめた、この校長先生と40人の役員、700人の生徒はすばらしいと感じました。震災で失ったものもあるけれど、得たものもあると思いました。



震災の悲劇

C組 富士 真

3日目の震災学習を終えて、やはり地震は恐ろしいと僕は実感した。阪神大震災の起こった1月17日は神戸の人々もほとんどはまだ寝ているときに地震は起こった。5時46分。一瞬にして神戸の街は、崩れ落ちた。死者5000人以上、家屋の焼失7000棟以上、家屋の全半壊150,000棟以上、避難箇所（ピーク時）1000所以上、避難者数300,000以上という、とてつもなく大きな損失を受けた。このような悲劇を語ってくれたのは、元鷹取中学校の校長先生だった。元校長の近藤さんは、他にも福井大震災との比較や、阪神大震災で亡くなった近藤さんの友人の話などをしてくれました。

近藤さんの友人は身長が1m70cmぐらいで、震災時、近藤さんの友人は、二階にいて震災が起こったとき、二階の屋根が友人の所に落ちてきて近藤さんの友人は屋根につぶされて、なんと身長が35cmになってしまった。何という悲劇だったのだろうか。

このように佐々木さんは、1月17日、5時46分の一瞬にして神戸の街が崩れ落ちた阪神大震災の悲劇の全てを2時間にわたって教えてくれた。

このように、僕は震災学習で教わった事を生かして、今後地震が起こってもすぐに行動できるようにがんばりたい。



傷ついた心

C組 藤井 敬也

1995年1月17日、大都市直下型地震によって5000名以上の方々の尊い命を奪い、町を破壊した。その中には、児童・生徒の被害も多く、幼い命も奪われた。

あれから2年2カ月あまり、新聞やニュースなどから、情報を得る機会が減り被災地の状況が伝わらなくなった。そこで、調査活動の機会を利用し、ボランティア活動をすることにした。活動内容は、阪神・淡路大震災で家を訪問して、震災の出来事を話してもらうという内容でした。

当日、僕らのグループは、ボランティア団体の西宮プロジェクト結ぶにお世話になり、鳴尾浜1丁目応急仮設住宅まで案内してもらった。そこには、たくさんの方々の仮設住宅にお年寄り、体の不自由な方々がたくさんいました。鳴尾浜の応急仮設住宅は、市街地からはなれているため、生活に不便だと思いました。案内してくれた渡辺さんが仮設住宅のお年寄りに交渉してくれましたが、断られたために、西宮に戻ることにしました。渡辺さんの話によると、震災で心が傷ついていたため、一度訪問したぐらいでは、心から話してもらえない、と言っていました。震災で傷ついた心をもとの心に取り戻すには、何十年もかかるのか？それとも一生かかるのか？そのどちらでもないのか？西宮に戻るバスの中で考えました。



あの日を忘れない

C組 山本 齊

1995年1月17日午前5時46分。阪神・淡路にM7.2の直下型の激震が襲った。

ここは、兵庫県神戸市長田区鷹取町である。これは、ここに住んでいた人の話である。その人は、洗面所で顔を洗おうとしていた。その時、あの忘れられない震災が襲った。洗面器がその人に飛びかかった。そして、屋根も落ちてきて、もうすこしで死ぬところだったという。福井大震災の時と同じように、二次災害が起り、一瞬にして火は広がった。鷹取町には大きな公園があり、そこで火の勢いは止まった。公園より向こうの側は焼け野原になり、手前は震災の影響しかなかった。そして、その公園のは1つの避難所にもなった。もし、その中にリーダーとなる人物がいたら、みんなを避難所に誘導させ、もっと被害が減っていたかもしれない、と話していた。リーダーとなる人がいること、公園などの大きな避難所になるところをいくつか作る。このように、簡単なことで、その被害を小さくすることができるということがわかった。

三宮商店街で店を開いていた人に、震災の影響を聞いたところ、店が全壊、半壊などの被害が多かった。また、クリーニング屋では服を盗む人もいた。普通では考えられないことである。震災学習で近藤さんがいったように、そのような大きな災害が起こったときに本当の自分が見えるという話が浮かんできた。



震災学習を終えて学んだこと

C組 片岡 千寿枝

震災学習の地震のビデオと講師の先生のお話を聞いて、2年前に起こった阪神大震災の後の人々の生き方、考え方、そして心について、とてもよくわかりました。

阪神大震災の後、「ボランティア」という言葉が盛んに言われてきました。私もこの震災学習でその「ボランティア」という言葉がとても頭に残りました。人に役に立つ事のできる人っていいなぁと思います。そう思ったのは、鷹取中学校の生徒と先生のボランティア活動のことをいろいろ聞いて、自分のこともあるのにそれをほうっておいて人のために一生懸命できることはすばらしいと感じたからです。特に、講師の先生のお話の中に、心に傷をおった女の子がおばあさんのために自分で食べ物を持ってきたり、いろいろと世話をしたりしていたという話が一番印象に残っています。

また、震災学習によって、震災後の人々の苦勞もよく分かりました。だから、私達はこの震災学習をいかして、もっともっと「ボランティア」について考えていくべきだと思います。私は、今まで「ボランティア」というものをめんどくさがって積極的には参加してませんでした。でも、この震災学習を終えて、この考え方は少し変わったなぁと思います。

あと、また機会があったら神戸にきて、震災のことについてもっと知れたらいいなぁと思います。



その時私は

C組 酒井理恵

「ドーンという音と同時に、洗面所にいた私は前につんのめりました。」
外は完璧なまでの曇り空、その空の下、私は今、修学旅行3日目の震災学習を受けている最中だ。目の前に広がる生徒達の頭・頭・頭の向こうには、講師の先生。そしてさっきまでのザワメキもなくなりつつある中、話は本題へと向かっていく。

『最も印象的だったのは、学校（診療所）にかけこんできた1人の血だらけの老人です。背中にはお孫さんをついで、「自分はいいから早く孫を見てくれ」と言われる。しかし医者は何もできなかった。お孫さんは死んでいたのです。そのうちそのおじいさんを我々は見失ってしまった。胸が張り裂けそうだった。』

必死になって死んだ孫を助けようとするおじいさんの姿が目に見え、だんだんそれっぽくなっていく。涙だった。「おじいさんは自分は痛くなかったの」「他の家族は」「孫が死んだときどんなに悲しんだことだろう」と様々な思いが頭をかすめる。そして何よりおじいさんのその自分より孫を、という行動に心をうたれた。自分がおじいさんの孫で、おじいさんが私の両親だったら、反対に私が親で、私の子供がそんな目にあったとき、私は何ができるだろう。何を思い、何をするんだろう、と思いました。

「私は心からありがとうございますと言いました。私の鷹取中学の先生、生徒の皆さんに対して。本当によくやってくれました。被災された方の世話を誰1人文句を言わずよくやってくれたんです。」

話がその地域最大の避難所鷹取中学校の話にさしかかった。講師の方は、当時その校長先生をされていた。その話もいよいよ避難の方々と中学校の人のとの奮闘記にさしかかったのである。

「不眠不休でした。避難所の方が寝静まった後も私達（先生方）は学校再建についてのめどについて話し合ったりして休む暇もありませんでした。それにそういうことで手いっぱい、私達の代わりに実際に手となり足となって働いてくれたのは生徒達でした。生徒達は避難所のトラブルに1つ1つ自分で対処し、世話の仕方にも誰にも言われなくても、自分で仕事を見つけてやってくれました。一番心に残っているのは学校もかなり落ち着きを取り戻した頃のこと。3年生に将来何になりたいか聞きました。トップは何と震災前後も人気のなかった教師とボランティアでした。」

同じ中学生として、人間として果たすことや、おっただけ、とさっさとその当時の回想している子供のビデオを見た時、本当の人間はすばらしいと思いました。本当に危機の時は常識、みてくれ、などといつも私達を縛り付けている何かがなくなり、その人の本来の姿が見えてくる事を知りました。私がもし、震災にあったとき、目の前に苦しんでいる人がいる時、親が重傷を負ったとき、人としての行動を求められているとき、私は行動できるだろうか。緊急のとき、自分より他人を優先できるだろうか。口では偉そうな事を言うが、実際何もしない人、いざというとき逃げ出す人ではなく、緊急の時、そんなことが頭をよぎったら、鷹取中学校の人達を思いだそう。きっと踏みとどまれる。「助かった命を、命を失った人の分まで生きようと思った。」

鷹取中学校のある生徒のこの言葉がいつまでも忘れられない。



悪と闘う正義の味方

C組 白 崎 祐 子

目の前の辛さ、厳しさから逃げちゃダメだ——。悪と戦い、そして勝ったとき、人間としての勇氣に気づき、生きていく目的を知る。自分が必要とされる人間だと知る——。これが近藤先生がおっしゃった、震災の時に中学生が学んだことの1つである。全ての人間が知る事のできるそれは、そして中学生だけではなく、大人達も、そしてもっと幼い子供達も学んだことだと思う。いわゆる、“自信”ではないだろうか。“震災”という変則的危機的状況下でそれを学ぶのは、ちょっと違うと感じる人もいるかもしれないが、話を聞くと、さしあたってそう感じる事はなかった。逆に、当たり前のように感じた。きれいな事ではない生の声は、自然と私の中に入ってきた。そして、それはみんな同じだろう。学校に来ない、しゃべることのできない生徒が、震災の時学校へ来て、そして手の不自由なおばあさんの手伝いをした。自分でできる事を見つけたのである。そして、おばあさんのお弁当をもらう為、少ないお弁当をもらおうと、一生懸命しゃべった。きっとその生徒は、自分が役に立ったことを、必要とされることを身をもって知ったはずだ。そして、文句を一言も言うことのなかった、他の生徒達も——。

目の前の状況から逃げず、それと戦い、勝った時、私達は自分のことを見つめる。それは、もう日常から……この瞬間から始まっているのだ。そして、本当に目の前に巨大な敵が現れた時——。



知 る

C組 高 田 祐紀代

阪神大震災は、大きな被害をもたらし、また、多くのものが失われた。こういうことは、テレビを通して何度も聞いてきたので、すぐく大変だということは知っていた。けれど、今回私は元豊取中学校の校長先生の講話を聞いて、あることに気づいた。自分は震災について知っていたようであまり知らなかったということだ。何がすごくて、何が大変だったのかということ……。

今まで、震災に関するさまざまなことを見たり、聞いたりしてきた。しかし、それはブラウン管を通してだったり、間接的だった。だから実感がわからない。だから、震災が起こった後でも防災対策をとっていないのが自分の現状だった。今回、生の声で体験のお話を聞いて、いろんなことが見えてきた。

すごかったこと、大変だったこと、それはトイレの問題であったり、食べ物のことであったりした。実際には、いろんなことが起きていた。私は、そんな事を知るよしもなくすごかった、とか、大変だった、と言ってきた。本当のすごさ、大変さは一言で言えるようなものではなかったのだ。

今回講話を聞いて、印象に残ったことがある。それは「知るということを知ってほしい。」とおっしゃられたことだった。この言葉を聞いて、ここには知るということを知らない自分がいるのかも知れないと思った。



地震と人間の強さ

C組 塚 田 真 奈

私達の班は、調査活動で『異人館』を調べました。萌黄の館・ティペア博物館・オランダ館・ラインの館など、さまざまな異人館を見学し、いろいろな事を調べることができました。その中でも一番心に残っているのは、「地震のときに萌黄の館の屋根の上にあったえんとつがおれてしまい、屋根を突き破った。」ということで、その話を聞いたときは、本当に地震のこわさというものを思い知らされました。

そして次の日に行った「震災学習」で、地震が起こった時の事、その後火事になった時の事など、さまざまな体験談を聞き、私の地震への恐怖はいっそう大きなものになりました。それと同時に私は「いざとなった時の人間の強さ」というものを知りました。自分の家も壊れてしまったのに、他の人達のために働く人、自分もおなかをすいているのに、子供や老人に食べ物をゆずる人などの話を聞き、とても感動し、「私もこんな人間になれたらいいな。」と思いました。

私達は、神戸・大阪に行ったことで、本当に多くのことを学べたと思います。「人のことを考える」事や「協力すること」などがその例ですが、この2つは今から私達が成長していくにあたってとても大切な事だと思うので、これから少しずつでも身につけていきたいと思います。



震災学習を通して

C組 宮 越 久 恵

居眠りをしたら、私がこの修学旅行の中で一番楽しみにしていたポートピアランドの1日フリー券をもらえないと言われていた「震災学習」。始めは「寝ないようにしよう」とばかり考えていたが、地震があった時の鷹取中学校の校長先生の話を聞き、鷹取中学校に被災した人達、またそこでボランティアをしている鷹取中学校の生徒達をビデオで見ていくうちに、私はその話と映像に吸い込まれていったのだ。

鷹取中学校は被災者が一番多かった学校で、配布された食糧も被災者全員にはなかなか行き渡らなかったそうだ。そこでボランティアをしていた生徒達は、きっと自分が一番最初に食べたかったに違いない。それでもおなかをすかせた被災者の人達のために、ぐっと我慢していたのだ。それがどんなに辛いことか、今の私には決して分からない。そして、その生徒達は、最後まで文句を言わなかったそうだ。

話をされた元校長先生は、私達も同じような被害を受け、同じような状況になったとき、きっとみんなが鷹取中学校の生徒のようにボランティアをするだろうとおっしゃっていた。それは5年後かもしれないし、10年後かもしれない。そしてそれがいつ起きても、この震災学習で学んだこと、心に残ったことを思い出せるように、ずっと心の中に残しておきたいと思う。

観劇〔ミュージカル〕より

• すばらしいの一言	井上 将 志	47
• 感 激	香 川 龍 一	47
• 感動の観劇	上屋敷 歌奈子	48
• ド迫力のミュージカル	酒 井 菜々子	48
• 観劇に感激	坂 下 麻衣子	49
• 人間であることの幸せ	久 野 貴 子	49
• ミュージカル, 好きになりました!	藤 野 由 衣	50
• 見た, 観劇を	漆 崎 拓 朗	51
• ミュージカルを見て思ったこと	吉 田 一 平	51
• ビバ・ミュージカル	林 泰 平	52
• 感激した観劇	高 嶋 雄 一	52
• 美女と野獣とその仲間達の愛	三 井 沙 織	53
• 自主・協同	石 井 利 佳	53
• 観劇から学んだこと	片 岡 万実枝	54
• 観劇の世界に触れて	大 塚 麻依子	54
• 一生忘れないですー劇団四季ー	日 下 あかり	55
• 夢の時間	山 口 真 紀	56
• 勇気, パワー	古 市 恵 理	56
• 11,000円とひきかえに……!?	吉 田 真理子	57
• プロの観劇	針 原 克 宣	58
• 美女と野獣を見て	戸 塚 有 沙	58
• 2つの世界	野 尻 千 晶	59
• 熱い感動の旅	森 瑠 依	59



すばらしい一言

A組 井 上 将 志

この修学旅行の中で素晴らしいことを一言で言うと、劇団四季というのは、日本のトップミュージカルということが最初に浮かんでくる。MBS劇場で僕たちは、「美女と野獣」を見てきたわけですが、一体何にそんなに感動したかというところ、演出だと僕は思います。

王子が野獣に変身する場面があったのですが、普通、衣装を変えるときというのは一度舞台裏にいった後着替えて舞台に出てくる、と行った方法が主だと思う。しかし、この劇団の場合、観客のいる前で、一瞬のうちに着替えてしまうところがすごいと思った。王子が野獣に変わる瞬間光が観客に向けられて、舞台が見えなくなったすきに変わってしまうということが素晴らしくてよかった。変身という神秘的な行動を見事に守っている。しかも、観客の目の前で。

劇団四季にはこの演出のすごさが目立っていた。その上に、コップを合わせて音を鳴らし音楽を作っているところもすごいと思った。20人ぐらいの人が手を交わらせてコップでリズムを作る。やっぱり20人近くの息があってないといけない上にすごい練習も必要だと思う。

劇団四季というトップミュージカルというのは、演出の高度さに練習するという基本が合わさってできる劇なのだとは僕は思う。まさに日本が世界に誇れるミュージカルなのだとは僕はそのように感動した。



感 激

A組 香 川 龍 一

「観劇？つまらん日程にしたなー。寝てよーぜ。」

友達とそんな話をして、1日目最後の目的地である、堂島にあるMBS劇場にいた。しかし、「つまらない」なんてことをいっていられたのは、劇がはじまるまでだけだった。幕が開いてから想像を絶する素晴らしい劇が始まったのだ。

僕達も、3年になれば文化祭で演劇があり、少しでも役に立つようにとも考えていた。そこで見たのが最高の劇だった。題は、「美女と野獣」。一度普通のディズニーの映画で見たことがあるものだった。しかし、それは僕が知っている美女と野獣ではなかったのだ。一番違うと思ったのは迫力だ。見ていると野獣の怒り方や悲しみなどがどしどし伝わってきたのだ。そしてそれを際立てているのが音や光だった。花火まで使って迫力を出しているのだ。僕達がする劇に花火までは無理だが、できるかぎり音の強弱を出したい。

観劇が終わってからの感想は、始まる前とは一転していた。内容としては、咎め称えているようなものばかりだった。それは、僕達だけではなかったはずだ。誰もがこの観劇で感激したはずだと思った。

僕達の目標は、あの劇の素晴らしい所を吸収し、文化祭の劇をみんなが感激できるようなすばらしいものにすることだ。それを目指して、僕達ができるかぎりの最高のものを作りたいです。



感動の観劇

A組 上屋敷 歌奈子

私が修学旅行で一番感動したのは観劇です。

『美女と野獣』誰でも知っている話です。もちろん私も、私は本でしか読んだことはありませんでしたが、内容はだいたい知っていたので、「つまらなそうだな」と観る前は思っていました。観劇の前は、電車に乗ったり、海遊館に行ったりして疲れていたのも、私の眠気はピークに達していたのですが、劇を観ているうちに、私は眠気など忘れていました。

とにかく、言葉もない程観劇は素晴らしいもので、どんどん、話にのめり込みました。途中「連音の参考にしなさい」と言っていた言葉を思い出して、よくよく見ると、すっごく舞台がしっかりしていて、森の中へ行くところや、場所の移り変わるシーンなど、スムーズに行われていて、実際は1つのステージの上の出来事なのに、『美女と野獣』の世界に入ってしまったみたいでした。

発声や踊りをととてもしっかりしていて、合唱なんかは、美声の嵐!!すっごくきれいで、いつまでも聞いていたい気分でした。

感動のラストシーン。野獣のひたむきな愛がすっごく泣けました。どんなになぐられても、なぐり返さないで、ずっと絶え続けている姿が、とても好きでした。魔女が言った、「お前が誰かを愛し、愛される事があれば。」というセリフは、「誰かを愛する事で、優しい心を持つようになれば。」という意味だったんだと思う。



ド迫力のミュージカル

A組 酒井 菜々子

眠くてたまらなかった私を、2時間あまりの間、まばたきするのも忘れるくらいステージに引きつけたもの、それは『美女と野獣』である。

花火や野獣の迫力に圧倒されたり、時々かわすギャグのおもしろさ、そして何よりも激しく踊りながらのきれいな歌声。私はすべてに感激し、すべてを尊敬した。

私が一番心に残った人は、やっぱり野獣である。おそろしい時と、うれしそうな時、そしておだやかな時やさみしそうな時……。色々な場面を表情や声だけで表さなければならないのだが、それをうまく表現していたように思う。恐ろしい時の表情は忘れることができないほど怖い顔で怖い声だったのだ。

また、主人公の娘がすてきな少女をうまく演じていたのも印象的だった。いつも笑顔で歌おうと思うと、きっと大変だろう。そしてみんなでのダンスもすごい迫力だった。色々な衣装、そしてきれいな歌。みんなが協力してこそ、あのようなすばらしいミュージカルになったのだと思う。

私たちは今年、演劇をするわけだが、この劇団四季を見習ってみんなで団結し、そして、みんな1人1人の個性を出して頑張ろうと思う。最後に、劇団四季のみなさま、すてきなミュージカルをありがとうございました。これからも頑張ってください。



観劇に感激

A組 坂下 麻衣子

「はぁ。」

終わった時、思わずため息をついていました。

3月13日私達は、修学旅行の1つとして、劇団四季の「美女と野獣」を見に行きました。私はそういう類いのものが苦手なので、友達と一緒に、「これより、吉本の『新喜劇』の方が良くない?」

とか言ってふざけていました。けれど、始まるにつれて私はどんどんミュージカルにはまっていきました。ライトではステージがすごく明るくて、また歌声もすごくきれいでした。花火などの火薬を使ったシーンでは驚き、楽しい音楽が流れるシーンでは、こっちも楽しい気分になりました。

一番心に残った所は、2つあって、1つは野獣の家来の人達がみんなで踊る所です。こっちも楽しくなってきて「一緒に踊れたらなぁ」と思うほどでした。ここで、女の人がスカートでくるくる回るシーンがあったのだけれど、そこで一部の男子がまじめに観たのが笑えました。

もう1つは、カップを使ったところ。たくさんの人が踊りながらカップを鳴らすところで、はげさないで上手にあてていたのに感心しました。(当たり前なんだけどね。)最高に感激しました!!ぜったいに忘れないでしょう!!



人間であることの幸せ

A組 久野 貴子

突然真っ暗になり、そして「ボン」という音とともに火と煙が見え、幕が開けた。ステージ上で爆竹を使うこと、衣装や舞台装置の規模の大きさに驚いた。きっと観劇した誰もがそう感じたと思う。オペラのように難しくもなく分かりやすかったこと、そして演じる側と観る側の距離が近かったことが、「良かった。」という感想を持ったことの1つだと思う。

初めて観たミュージカル、「美女と野獣」。変わり者の2人がしだいにひかれ合っていくという物語。というこれだけが、初めて映画を見たときに心に残ったもの。しかし、今回もう一度ミュージカルで観て、今まであらずじしか思い出になかったものが、いくつかの言葉や場面で残るものができた。

その中の一つで、城内の家来が時計やボットになりかけのころ、「人間だったことがどんなに幸せだっただろう。」としきりにつぶやいていた場面。これは人間であるからこそ、体が自由であるからこそ、いろいろな事ができるという意味だろう。

震災学習、そして調査活動で阪神大震災のことを学んだこともあり、このミュージカルが震災で心の傷を負ってしまった人達に、「何か失ってしまったとしても、生きて動けるということが幸せなんだ」ということを訴えてくれているような気がした。



ミュージカル、好きになりました！

A組 藤野由衣

私が今回の修学旅行で特に印象に残っているのは、ミュージカル、ディズニーの『美女と野獣』を鑑賞したことです。私は『美女と野獣』の話の内容を全部は知りませんでした。そして、わざわざミュージカルで観なくても、いつかアニメのビデオでも借りれば……と、思っていました。しかし、鑑賞し終わった時、本当にこのミュージカルを観ることができて良かった、と強く思いました。

まず始めにすごいと思ったのが、王子が魔女によって野獣に変えられてしまうシーンです。バババッとすごい音と光で驚いている間に、次の瞬間には、もう王子は野獣になっていました。今、ここで演じているとは思えない速さ、まるで、テレビ画面で観ているようでした。このシーンをはじめ、どれも美しい衣装や大道具、凝った演出、何より役者の人達の素晴らしい演技で、最後まで感動してばかりでした。

劇場で他のお客さんに、私達は何の集団なのかを尋ねられ、福井から修学旅行で来たことを伝えました。すると相手は、

「修学旅行の中に、このような観劇を組み込めるなんて、素晴らしい。」
と言われました。私もそう思いました。

私達は次の文化祭で演劇をします。それを、今回鑑賞したミュージカルのように、人に何か感動を与えられるものにしたいです。



見た、観劇を

B組 漆崎 拓 朗

13日の夕方、僕はとても迫力のある観劇を見た。「美女と野獣」。初めて見た劇だった。内容は、感動する場面が多かったが、それ以上に舞台上での演出に驚いた。

まず1つは花火だった。「ドドン」という音からまぶしい光が飛び出して観客を魅了し、感動させた。僕はこの花火を使ったのにまず驚いた。

次は劇団の人達の踊りにびっくりした。この劇の中には、コップを道具として使って踊っていたのだけど、この時の動きがみんな全く同じで、コップをまるで自分の体の一部みたいに使っていた。しかも、タイミング良く。僕は何人が失敗している人がいるのではないかと舞台をじっと見ていたが、そこには助け合うという言葉しかなかった。みんな1人がまちがえてしまってもちゃんとカバーしているのだ。僕はこのことにすごく感激した。

3年生の文化祭。僕は体育館という舞台で1、2年生の前で劇をする。シナリオや役決めとかはまだだが、この「美女と野獣」の劇から得たことを文化祭にいかしたいと思う。

最後に、僕はこの劇にあえてとてもうれしく思った。だって、この劇は僕達を魅了し、本当に感動させてくれたのだ。

Thank you

Thank you———



ミュージカルを見て思ったこと

B組 吉 田 一 平

僕は、今回のミュージカルでは、疲れて寝てしまうかもしれないと思っていたけれど、寝る余裕もないほどすごいものだった。今までの劇では見たこともないような派手な演出などは、一日見ただけで劇のすごさというものを実感できた。建物などのつくりも、僕達の学校の文化祭で行うものとは比べものにならないと思った。途中で見る人を楽しませるために、グラスを使った演技をしたりして、見ていてほとんどあきないシナリオになっていたと思った。そのいろいろな人物が登場して、いろいろな個性を持っていた。どういうことかという、怖い野獣の心の変化や、小さい子供が首だけでしゃべって相手を驚かせたり、タンスの格好をした人が自分の体(タンス)から服を出してきて、昔のことを思い出したりしていて、1人1人の存在を強くアピールしていたと思う。そうすることによって、このミュージカルの独特の文化や世界が広がって、見る人を楽しませてくれたんだと思った。

今回のミュージカルは、絶対に誰が見ても何か1つは今後役立つことが見つかると思う。だから、このミュージカルはたくさんの人から支持されていると思った。僕は、今年の10月に、演劇をするけれど、今回見たミュージカルをまでは、ほど遠いとしても、相手に自分達が何を伝えたらいいのか、ということが伝わるような演劇ができてほしいなと思った。



ビバ・ミュージカル

B組 林 泰 平

最初にチケットを配られたときに、値段の11,000円と書いてあるのを見て、驚き、また怒り、そしてあきれた。なぜミュージカルにとき（すいません）に11,000円も払わなければならないのかと思った。

だれかが、

「劇見ないからお金返して。」

と言っていた。僕もそう思った。でもそんなことはできそうもないので、こうなったら11,000円分を見て帰ってやろうと開き直って寝ずに見ることにした。

ところが、見てみるととても感激した。まず、スケールというかセットの大きさにびっくりした。次に動きに驚いた。見た人しかわからない事だと思うけれど、あの居酒屋でのコップをカチンカチンしたのはすごいと思った。回りを見ると寝ている人がいたので、何ともしないことをするのだろうと思って親切に起こしてあげた。話のストーリーとかはディズニーと一緒にあったけれども、やっぱり11,000円の価値はあるミュージカルだった。

そう簡単に見られる値段ではないから、修学旅行で見といて正解だったと思う。他の人はどうか分らないけれど、この修学旅行で一番おもしろかったのはこの観劇を見たことだと思う。3年生になったら、連音や演劇などもあるので、それらの参考になるようにしっかりと目に焼きつけておきたいと思う。



感激した観劇

B組 高 島 雄 一

3月13日の修学旅行1日目の夜、大阪で劇団四季の観劇、「美女と野獣」を見た。そこでは、今まで見たことのないものがあつた。激しい閃光から現れた魔女、そして光とともに男が野獣の姿になる場面では、いつ姿が変わったのかわからなかった。そして爆音が場内に響く。僕は寝てしまうのではないのかと思ったのだが、その音で寝てしまうどころではなかった。その他に、歌やダンスをしたりしてどんどん楽しい展開になっていった。お城や、村の家などは良くできており、風景とぴったりとマッチしていた。その製作費は、いくらかかったかは知らないが、とても多くの金を使って作ったのだと思う。

場内では、ちょっとしたサービスをしてくれる。トイレに行く人の足元を小さなライトで係の人が照らしてくれるのだ。今までこのようなことはなかった。聞いたことなのだが、この「美女と野獣」は約18カ月ぐらい公演するとか。だから聞いたあの大きな声を毎日出していると思うと、さすがだなと思ってしまう。

この観劇で見て思ったことはたくさんある。その中で一番思ったことは、世の中いろいろなものがあるということ、今まで見たことのないもの、写真でいろいろなものを実際に見たときの新鮮な感じがすごくいいなと感じた。この観劇を通してもっといろいろなものを見たいと思った。

美女と野獣とその仲間達の愛

B組 三井沙織



“美女と野獣”。私は、劇団四季によるプロミュージカルを見た。1人1人の感情がわかりやすく、性格が出ていて、とてもおもしろかった。休憩を含め2時間半、私の頭には劇のことしかなかった。城の主の野獣の心の移り変わり、召し使いの行動、町のへんな奴、パパの研究失敗のオンパレード、どれも私を楽しませてくれた。最新の技術を使った大道具、なによりも、演技をする1人1人の演技力に驚かされた。感情というものでは表せないものを、体全体を使って表現し、私達に伝えてくれた。演技とは思えないほどの自然さ、ちょっとしたお客への心遣いが、より私達の心をひきつけたのだらうと思う。それに、演技者の小さなしぐさが、私達に時間を忘れさせたのだらうと思う。私達はこれから3年生になり、文化祭で演劇をしなければならない。本当にできるのかすごく心配になった。後約7カ月で、何から何まで自分達でつくっていかなければならない演劇、劇団四季のような演劇はできないと思うけれど、私達にできる事を出しきれるような、すばらしい演劇ができれば最善だと思う。すばらしい演劇をするには、仲間の協力が必要だと思う。時にはぶつかり合いもあると思うけれど、演劇をよくしていくためにそれも大切だと思う。そういうことを乗り越えていけば、きっと良い演劇ができると思います。今はまだ、何をするかも決まっていないけど、今回の観劇を無駄にしないような劇にしたい。

自主・協同

B組 石井利佳



2年生最後の大きな行事でもあり、3年生への出発の意味もある修学旅行。不觉にも、カゼで熱を出してしまった私。ボーッとしていた私だったけれど、あの大阪での劇団四季による“美女と野獣”は、今でもはっきりと頭の中に残っているくらいに、インパクトの強いものでした。

“美女と野獣”は、前にビデオで見たことが何度かあり、ストーリー展開や劇の中で使われていた効果には見覚え、聞き覚えがあったものの、すごく新鮮味のあるものでした。1人1人の演技がすばらしいのはもちろん、団員みなさんの息がピッタリあっている事がとてもすごいことだと思います。その時、私の頭の中に附属中の教訓がふっと横ぎりました。1人1人がしっかりしていないと1つのすばらしいものはつくれないし、たとえ1つのものができたとしても、1人1人がいい加減であれば、すばらしいものは作れない……。劇団四季の方々も、あのすばらしい劇を作り上げるまでの苦労と、自分自身を作り上げてきた努力は、すごいものであったはずだし、附中生もまた、そのような教訓の中で、自分を成長させ、仲間と分かり合い、何かに取り組んできた。だから私も……。

この劇団四季による“美女と野獣”は目や耳を十分すぎるほど楽しませてくれたうえに、私に大切な事を教えてくれた。思い出深いものとなった。

教訓 「自主・協同」――



観劇から学んだこと

B組 片岡 万実枝

最初はあまり楽しみではなかった観劇。「美女と野獣」は、ディズニーのアニメでビデオを見たことがあったからだ。

劇場について見ると、客は満員だった。予想とは違っていた。私の席は通路側だったので見やすかった。

劇が始まると、いきなり真っ暗になった。すると魔女が巨大になって花火がちったりした。すごい仕掛けだ。他にもいろんな工夫があった。例えば、暗い森の場面では、黒いすける素材の布をたらしあったり、ろうそくの衣装の部分から火が出てきたり。とにかくたくさんの工夫点があった。また、セットも豪華だった。

そして何よりもすばらしかったのは、演技をしていた人達だと思う。まず歌がうまい。どんなに動いていても音程がはずれてなかったし、とてもいい声だった。そして言葉をハキハキと言っていた。客席に何を言っているのかがよく伝わっていた。

私達は3年生になると、文化祭で演劇をする。今までの先輩達を見ていると、毎年よりすばらしい劇を見せてくれる。だから私達も前よりすばらしい劇を作っていかなければいけないと思う。そのためには大阪で見たのを生かすことが大切だ。これは私達には見えない努力があったのだと思う。

文化祭まであと半年ある。長いようであつという間に過ぎていってしまうと思う。その時間を十分に使って、いい演劇を作りたい。



観劇の世界に触れて

B組 大塚 麻衣子

あの歌声、あの曲が、すべてがまだ耳に残っていて離れない！あの踊り、あの表情が、すべてが、まだまぶたの裏に焼きついて離れない！私の頭の中でベルが、野獣が、ガストンが、ルミエールがみんなが、

歌って踊って演じている。修学旅行の1日目、私はすごく圧倒されるものに会った。

初め、私は人形が歌を歌っているのかと思った。なぜなら、マイクをつけていてもあんなに大きくきれいな声が出ないと思ったからと王子が瞬間にして野獣に変わったからだ。びっくりした。光や音やいろいろなものが目の前で飛び交って、歌や踊りやいろいろなものが繰り広げられて……すごいと思った。舞台のセットもすごいと思った。キャラクターが歩くたびに後ろのセットが動くのも工夫していると思ったし、キャラクターが（例えばベルならベル自身に）なりきっているというのもすごいことだと思った。私は、この劇によって、3年生でやる演劇で何ができるか、必要か学んだ気がする。それは、自分が演じるキャラクターになりきること、みんなに楽しんでもらうように工夫すること、そしてみんなで協力して一生懸命がんばること。この劇を見て感動した人はきっといっぱいいると思うけど、私も3年生になったら、絶対に自分で演じて、みんなに楽しんでもらうような劇をやってみたいと、心からそう思った。本当にいい体験をしたと思う。



一生忘れないです ～劇団四季～

B組 日下 あかり

さすが、日本一と呼ばれる「劇団四季」でした。皆さんやはりもうお上手で……だからあんなに感動してしまうんですね。演技ができませんかならない、歌も上手でなければダメです。そして踊りも……。

初めの方に、ベルと町の人達が出てきますが、皆さんどれほど練習されたのでしょうか？想像もつきません。ステージの中心部は最も視線が集中するのでもちろんのこと、ステージの両端の人や建物の中の人まで1つの音楽に合わせて歌い、動作をしています。そして、ステージいっぱい動き回る町の人達の間をぬって、ベルは両手に本を支えてスタスタと歩くのです。少しでもタイミングがずれたら他のキャストとぶつかって失敗してしまう。その一步が、少しでも遅れたら……大ゲサですが、私はそう思いました。

「その役になりきる」——。これはとても難しく、一番に大切な事だと思います。たとえ何の役であろうと、動作の1つ1つからステージの雰囲気や醸し出され、1つの劇を作っていくのです。そう、すごく細かい動作まで。歩き方、仕草、表情の変わり方、動き方……この人はどういう人なのだろうと考えないと分かりません。それに歌い方だってそうです。シナリオを書いた人はこの人をどのような位置に占めたかったのだろう……本当に、どんなにチョイ役でもこれは大切だと思います。メインキャストだけで物語を作っていくのではないのです。「美女と野獣」でしたら、町の人や城の食器類、それだけではないです。大道具・小道具全体を合わせて進行し、幕を閉じるのです。当たり前のように、今回の観劇で私はこれを強く感じました。

ではもっと楽しい話題にしましょう。劇を観た後に「どの役が一番良かったの？」と聞かれたとしたら、どう答えます？私だったら「ルミエール」って答えます。ルミエールは燭台です。両手と頭を同じぐらいの高さに上げると一層燭台だってことがわかります。結構おしゃべりで、恐ろしい主人野獣にも勇気を奮って意見を言います。親しみやすいし、御調子者で、召使の長コッグスワースよりも人気があるんじゃないかと思います。それに優しい心の持ち主で、召使の中では欠かせない人物です。「劇団四季」の団長さんらしいのですが、ビデオのルミエールらしさを保ったまま、それでいて自分らしさも出していたのではないのでしょうか。

ベルは、申し分なくやりこなしていたと思いますね。野獣も面白いところがあって、荒々しさ・心のせつなさなども表現するのが上手でした。コッグスワースは、ルミエールと話しているところが良かったですし、ミセス・ボットは暖かみがでていたように思います。

もし「一番嫌いなキャストは？」と聞かれたら私は意気込んでこう言うでしょう。「ぜーったい、ガストン!!」もうガストンはすべてにおいて大嫌いです。自分の利益ばかりを追っているあまり、相手の気持ちが悟ってやれなくなってしまっています。ガストンという人物は嫌いだけど、役をやっていた方はスゴいなぁと尊敬しているんです、反面。なぜって、すばらしい演技力でしたからね。

もう終わりに近づいてきたみたいですね。私、「劇団四季」の『美女と野獣』を一生忘れないです。また観たい。それから、文化祭の演劇を成功させるためにも、役立たせて頂きたいです！

夢の時間



B組 山口 真 紀

私は、1日目に観た“美女と野獣”の観劇について書こうと思う。「夢の時間」なんというくさい題名をつけてしまったが、まさに夢のようになって感じなほどすごかった。本当に目が離せなかった。舞台はすみからすみまで素敵で、どこをみればいいのか分からなくなるくらいに本当に本当に素敵でした。11,000円の価値はあるってみんな言っていたけれどそのとおり。ねてた人もいたけれど、すごくもったいないって感じた。私なんか睡魔に襲われたのは一度もなかったよ。

私は、ビデオで何度も“美女と野獣”を見た事があるけれど、何回見てもあきないくらいおもしろい。でもビデオよりもっともっと、ずっとずっとすごかった。歌もセットも迫力があるし、しかけとかものすごく夢みたいって感じだった。すごく素敵で世界中のみんなに見せたいくらい。「どこが1番よかった？」て聞かれてもこまる。「全部」って答えちゃう。でもその中でも……っていうなら、ディナーの時かな……。ナイフやフォーク、塩とか本当にいろいろなものが出てきてキレイ。

で、最初の方の題名の話に戻るけど、本当に夢。夢ってあっという間に終わる。5時間以上は寝てるのに……。『美女と野獣』も3時間ぐらいがあっという間に終わってしまった。やっぱり寝ちゃった人、もったいないよ。11,000円っていうお金の問題じゃなくて、あんなに素敵なものを見逃しちゃって……っていうので。とにかく吸い取れるものは全部吸い取れて事で、3年の演劇に生かそうと思う。

勇気、パワー



B組 古 市 恵 理

観劇ってあんなにすごいものだとは思わなかった。劇団四季の観劇「美女と野獣」を見るまでは……。本当にすごい迫力で一場面、一場面ドキドキしながら見ていた。いろいろアトラクションがあり、ビックリさせられたところもあった。私は、ディズニーは大好きで、映画とか見ても勇気を与えられたりする。「美女と野獣」を映画でなく、ミュージカルとして楽しむと、映画では味わえない、感動と楽しさがある。歌や踊りを実際耳と目で聞ける、見られる。

劇団四季を見るのは、最初から面白くないものだと思っていた。劇場に向かうバスの中でも皆嫌そうだった。「ねむっちゃうかも。」と言う声も聞こえた。しかし、上映になると、皆寝る暇もなかったように思う。眠たくても眠れなかったのではないだろうか。それほどすごいものだった。出演している人達は、どのようにして演じているのか知らなかった。1人で歌い踊り、多数の客の目の前で披露していた。私もこの劇団四季のミュージカルを見て、勇気や自信・パワーをもらって帰ってきたと思う。また、感動を与えられた。

この劇団四季の皆さんのように、いきいきと楽しく、見てもらう人達に「すごい」などと印象を強く与えられるような連音を学年全体で協力し成功させたいと思う。

とても楽しい、面白い修学旅行でした。



11,000円とひきかえに…!?

B組 吉田真理子

修学旅行で私の心に残ったものの1つに観劇の鑑賞がありました。これは劇団四季の「美女と野獣」でした。1日目のバスの中。入場のための券をもらい、ふと見ると、なんとそれは、S席11,000円でした。

それを見た時私は心の中で「つつつ。11,000円の価値があるのか見てやろうじゃない。」と、結構ケンカごしでした。そしてその約1時間後、開演。それはミュージカルでした。すぐに休憩になってしまいました。私は夢中になっていて、時がたつのを忘れていたかのようにでした。とにかくセットが美しく、歌声がすばらしい。そして迫力もある。休憩後の約1時間もすぐたってしまいました。一番心に残った場面は、野獣が人間ビーストに戻る場面でした。ピカッと光ってよくわからないうちに野獣は人間に戻っていました。しかも宙に浮いて。服を脱いだ様子也没有。どうやって変身(?)したのか私はいまだに分かりません。でもそれはあの劇団四季がどれだけすばらしいかを表しているのでしょう。

このミュージカルは今まで見たものの中で、一番すばらしかったと思います。そして値段も今までで一番だったと思います。しかし、本当におもしろかったのです。キラキラと踊る様子が脳裏に焼きついてます。本当にステキですばらしくておもしろいミュージカルでした。そして私はこれを11,000円と引きかえにしました。



プロの観劇

C組 針 原 克 宜

観劇が始まる。自分の体がそう感じると、体が観劇にくぎづけになった。ガストンとベルが、ディズニーで見たものとそっくりでまたくぎづけになった。演技はすべてオーバーアクションで分かりやすく、見やすかった。野獣が急に性格が変わり、紳士になろうと頑張るところがたのしいところだった。最後のベルとガストンの対決がちょっと大げさだったけど、音が迫力があつたからなかなかのすごさだった。途中、ベルが夕食を食べようとしたとき、Mrs.ボットが親切にしてみんなでパーティーみたいなことをして、とってもすごいダンスや歌は感激しました。でも、その後でベルがおなかいっぱいになったと言ったときに、いつ食べたのか不思議になった。僕の横に小さい子供たちが見ていて、横のお母さんにいろんな人の言葉の意味を聞いてうるさいときがあった。ベルのお父さんの発明が一体なんだったのか分からなかった。最後、みんなが元の姿にもどり、幸せになってとってもよい感激だったと思った。見終わってから友達数人と話をしていた、文化祭はもっとすごいものにしようと思った。演出の人や照明のとかとてもうまくてさすがプロだと思いました。最後に、一番最初に出てきた魔法使いの人が魔法を使ったとき、すごくびっくりした。あれがきっと、最後まで期待させたのだと思う。



美女と野獣を見て

C組 戸 塚 有 沙

1日目の夜、私たちは11,000円もするような席で、“美女と野獣”を見に行きました。本当のところ、「もうちょっと安い席でいいのに。」という感じでしたが、始まった瞬間、私の目はくぎづけでした。“美女と野獣”は映画で一度見たことがあり、ストーリーは知っています。けれど、かなりのスケールの大きいものなので、“美女と野獣”はこんな小さなステージで表すことはできないだろうと半信半疑だったのです。けれど、それは大間違いでした。まるで映画の中にあったものが、そっくりそのまま出てきたようなものだったのです。それからは、あの場面はどう表現してくれるのだろうとウキウキしながら見ることができました。特に、主人公の「ベル」がディナーパーティーで楽しい時を過ごすところは、期待以上のもので、思わず「すごおい」と声をもらしてしまいました。私は、これほどまで、見入ってしまうようなものだとは思ってもいなかったので、11,000円の価値は十分あったなぁと後でしみじみ感じました。また、観劇中に頭を動かす前の人に腹を立てた自分がちょっとうれしかったです。

私は、この演劇を見て、本当に感動しました。映画の中にあるいろんなものを。こんな小さなステージにもってくるのですから。そして、見事に、それぞれの役をやりこなした方達は、素晴らしいです。また、機会があれば、ぜひ見たいと思いました。



2つの世界

C組 野尻千晶

大きな旗をもった人間に連れてこられたのは、「MBS劇場」と書かれた巨大なビルの前だった。

「ここはどこだろう。今からここで何をやるのだろう。」

理由が分からずウロウロしている僕たちを人間は劇場の中に連れて入ると、出て行ってしまった。僕は回りを見回して見た。知らない人間ばかりが前を横切り、聞きなれない方言で言葉を交わしている。大きなホールに前には、ステージらしきものが設置してあった。

「今からあのステージの上で何が起きるのだろう。」

少し興奮気味の僕たちの耳にけたたましいサイレンが聞こえてきたと思うと、僕たちの目の前にもう1つの世界が映し出された。その世界はどの世界よりも早く話が展開していった。野獣と少女ベルとの出会い、ベルと父との別れ、そして再開。その世界は僕たちにまばたきする余裕さえ与えてくれなかった。というよりか、まばたきするのがもったいないくらいだった。やがてその世界はクライマックスを向かえ、ベルと野獣が恋に落ちた。すると野獣はかけられていた魔法がとけて人間となった。そしてラストを向かえ、画面に幕が降りた。

夢のようだった。僕たちの住んでいる世界とは比べものにならないくらい清纯ですがすがしいものだった。映し出された世界を見ていて何度あの場所に行きたい、と思ったことだろう。しかし、無理な話だ。だからあの世界の人間のように何事も頑張ってみよう。



熱い感動の旅

C組 森 瑠 依

「ぜったい、いいから。じっくり見てきなさい。」

と母がボンと肩を叩いた。実は、母は私たちが「美女と野獣」を見る前に既にみに行っているのだ。修学旅行のだいふ前から、そうやって念を押していたのだから相当いいらしい。

「フワァ〜」

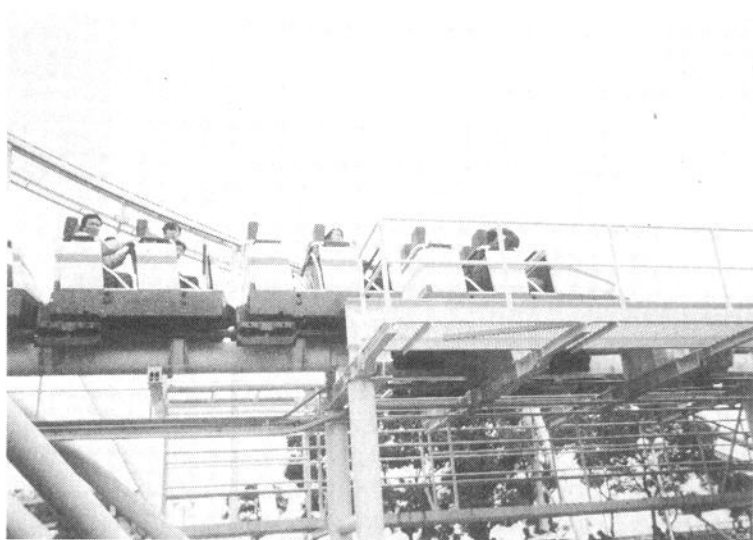
私は会場でカバのように口を開けていた。あれだけ母に言われた劇も睡魔には勝てるわけないだろう。——とそうしている内に、会場内は暗くなった。お客がざわつき、舞台は始まりを告げた。突然私は何かにとりつかれたように、「美女と野獣」の世界にどっぷりはまってしまったのである。あの主人公ベルの美しい声、軽やかに弾むステップは私の心も踊らせた。だんだん私のこぶしの中も興奮とともに、汗ばんでいるのが分かった。私はいつ頃からか演劇というものに興味を持っていた。小5、6の時は演劇部で、とりえず自分の役になりきるため鏡とにらめっこしていたのを今でも覚えている。

「ワァ〜。パチパチパチパチパチパチパチパチ。」

と幕がおりたとたん会場で響いていた。私はもう最高の料理をお腹いっぱい食べた気分だった。私はこの演劇でたくさんの表情をみつけ、また自分も作れた。それは感動という響き——。きっと私達の演劇を多くの人々の表情を肌で感じ、熱い感動を伝えるのであろう。

さまざまな思いより

• ポートピアランド	厚	富 博	61
• 修学旅行で得たこと	玉 井	利恵子	61
• 私の修学旅行	前 田	ちひろ	62
• 修学旅行は行けなかったが.....	前 田	貴 弘	62
• 空を遊ぶ	中 田	幸 男	63
• 新神戸オリエンタルホテル	坂 井	誠 吾	64
• 修学旅行を振り返って	寺 井	美 裕	64
• ジェットコースターと私	青 山	紘 子	65
• 修学旅行の日	片 山	智 子	65
• 走りまくった修学旅行	小 西	真 希	66
• 学んだこと	山 根	あさみ	66



ポートピアランドにて



ポートピアランド

A組 厚 富 博

修学旅行3日目、震災学習も終わり、一番楽しみにしていた時がやってきました。楽しみをとっておくのは、いいことだと実感した。僕が一番最初に見つけたのは、たまごっちが当たるといふ、1回千円のくじ引きだった。やろうと思ったが、そのときはしなかった。今思えば、ウソくさかったし、1回千円もかけてやったけど、バカみたいだったと後悔している。

僕は坪内君、藤田君、山口君、山田君、岡君、などと行動をとにした。絶叫マシンを中心に回っていくことにした僕らは、ジェットコースター系は乗りつくし、船がふりまわされるヤツとか、おばけ屋敷などもいきつくした。ただ、水平バンジーだけは乗らなかった。藤田君は、乗ったらしいけど。

そのあとは、おみやげや、ゲームのところでスキーのシュミレーションゲームやバイクのレースゲームでみんなと対戦した。僕は2位だった。ゲームが終わったあと、たまごっち目当てに千円でくじを引きに坪内君と行った。はずれはなく、5位まであり、特別賞にたまごっちがあるといったぐあいで、僕は結局、5位のテトラというテトリスやピコソンのできる小さなゲームしかあたらなかった。まあいっしょあり、健康で仲よく、小学校の時の修学旅行にひびきするくらいいいや、それ以上の修学旅行だったと思った。これから何を楽しみに学校生活をしていけばいいのかと思ったくらいだ。



修学旅行で得たこと

A組 玉 井 利恵子

中学校生活のメインイベントともいえる修学旅行。本当に楽しい旅行だった。もちろん反省点は色々あるけどそれ以上に満足できた部分の方が多い。

“美女と野獣”のミュージカルは、今でも頭の中に場面が浮かんでくるし、調査活動で使った交通機関や訪問先で学んだことは、今後いかすことができる。震災学習での面白い講義や、天保山、ポートピアランドなどでつくった皆との思い出では忘れることはないと思う。どれだけ価値があるかわからないけど、プラスになった。

今回、私は時間にできるだけ気をつけようと思った。けれど、完全に時間を守ることはできなかった。学年単位などの団体行動の中での規則違反は、たった1人でも全員及び、相手にも迷惑がかかる。それを忘れていたことが少なくなかった。

修学旅行を終えて、私達は成長していなければならない。又、学んだことをいかしていくこともしなければならない。あまりホッとする間もないうちに、最高学年としての自覚を高めていかなくてはならない。修学旅行を終えてみたものの、まだ何も終わっていないことに気付いた。又、実行委員の人達に任せきりだったり、協力してもらう形だった面も多かった。いい意味で、もっと独立できるようになりたいと思う。それにしても、もっともっと遊びたかったなあ。



私の修学旅行

A組 前田 ちひろ

“修学旅行”とは学问を修める旅行、つまり学ぶための旅行です。そんな中で、私が行って来た大阪・神戸の修学旅行とは一体どんなものだったのか。私が大阪・神戸で考えたこと、吸収したこと、そしてみんなの中で学んだことは…。

1日目ー。

出発の日、たくさんの先生方の見送りの元、私たちは大阪へ向かいました。そして大阪に到着。1日目のメイン。言うまでもなく演劇の美女と野獣。1言で言えば迫力のすごさ。演技しているみなさんととてもパワフル、ダイナミック、しかし繊細な心の表現をしっかりと私たちに伝えていたと思う。それだけでなく演技している裏では照明、背景の移動などみんなの力を1つにしてこれだけの演劇。

2日目ー。

調査活動。まだ震災の傷跡が残っておりここはやはりあの神戸だと思った。阪神大震災、神戸の人にとっては耳をふさぎ閉ざしてしまいたい様な響きなのだろうか。神戸の人たちに接してそうは感じなかった。決して忘れないけど思い出さない大震災。復興を目標として生きていく、そんなオーラが神戸の人たちから出ていたように思う。

修学旅行で先生に何度もしかられた。いやなこともあった。でもやっぱり修学旅行、楽しい思い出ばかり残っている。



修学旅行は行けなかったが…

A組 前田 貴弘

僕は、修学旅行には行けなかった。それはかぜをひいてしまったからだ。しかし、修学旅行までの準備はけっこうはりきってやっていた。なぜなら、くらしのサポートという実働員に入ったからだ。くらしのサポートの実働員では、ホテルの人へのお礼やホテル内での夜のみまわりなどいろいろあったが、僕にはそのようなことは関係はない。だがそれまでの準備はしつこいようだがけっこう自分の中ではがんばったと思っている。

もう1つ、調査活動の方では、ちょっといけなかったことがかなしい。あの神戸にある異人館や、有名なお菓子屋（別に食べたいわけではない）などに行ったりすることだ。他の班の人はどうだったろうか。楽しかったのだろうか。まあそれはそれでいいと思うが。でもなんていっても1番かどうかは分からないが悲しかったことといえば観劇と、買いものと、他の人とかと一緒にいたりすることだったと思う。観劇は美女と野獣があったけっこう有名なのでみたかった。買いものは、神戸や大阪のものをかいたかった。友達とは、話をしたり遊んだりできたので行けなかったことはかなしくさみしかった。ともかく、修学旅行へ行けなかったのは残念だった。けどそれまでの準備などは楽しかったし、けっこうなやりがいがあったよ。でも修学旅行には行きたかったよ……。



空を飛ぶ

B組 中田幸男

僕は3日目の遊園地で、クリフハンガーという、宙づりになって地上30Mのところでロープ切って飛ぶというのをやった。僕は30Mのところへ行くまでに、死ぬんじゃないかと、生きて帰れるんだろう

か、とか考えた。下の人が、

「スリー、ツー、ワン。」

とカウントをとりはじめた。そして、1番右の文村君がロープを切った。少し宙にういた。というか落ちた。そしてすぐにすごく速いスピードで飛んだ。

「うわー。うおー。死ぬー。」

みんなさげんだ。すごいスピードだった。今度は後ろむきのまま落ちた。やっとなら足がガクガクだった。でもすごいおもしろかった。いっしょに乗った3人の心の中に何かがおきた。そのとたん、3人はまた飛ばうとした。2人を道づれにして。その名も林君&安田君。2人を連れて1,000円はらってまた乗ろうとした。そしてまた宙につられていった。2度目は少し落ち着いたけれどやっぱりこわかった。

その日で、その他に6つか7つくらいのマシンに乗ったけれども、このクリフハンガーほどこわくはなかった。このクリフハンガーの力はすごいと思った。そして、もう1度乗りたいとすさまじく思った。



新神戸オリエンタルホテル

C組 坂 井 誠 吾

少し前テレビで「HOTEL」というドラマが放送されていた事がある。今もまだひょっとしたらどこかの局で放送されているのかもしれないが自分の知る限り今はもう放送されていない。気付いたら終わっていた。というかんじのドラマだった。初めてそれを見たのは確か小学3年生位の頃だったろう。内容があまりにくさくてドラマの原作者（またはシナリオライター）の顔をおがんでみたくなかった事をよく覚えている。主人公の一平というホテルマンが宿泊客とのトラブルをとおして人間としてもホテルマンとしても成長していく様子を描いた（と自分は思っている）かなり長期にわたって放送されていたドラマだった。毎回見ていたわけではないが、ふと気付いて見る度ごとに主人公の一平が壮絶な死を遂げていて、出演者がかわっていたのは面白かった。現実にあんなトラブル続きのホテルがあったらほぼ間違いなくつぶれていただろうが、そこもまた現実離れした物語がドラマたるゆえんで楽しかった。

考えてみれば自分はこのドラマを見てからずっとそういう大きなホテルというものにあこがれていたらしい。今まで宿泊した事のある所といえば崩れかけの旅館か、友人知人の家ぐらいだったため一度くらいそういうホテルマンのサービスを受けてみたいと思っていたのだ。が、オリエンタルホテルにとまってみて分かった。自分にこういうのは性に合わないようだ。でも、非常に勉強になったと思う。



修学旅行を振り返って

C組 寺 井 美 裕

自分は1日目の夜と3日目の事はあまり知らないが、2日目に対しては花丸をつけれると思う。アボ取りや下準備など苦労しただけあって自分の思っていたよりずっとよいものになったと思う。最初神戸に着いた時は思いもよらないアクシデントにいきなりぶつかったが、みんなで力を合わせて通りぬけた事や、先生方に聞いた事はすごく生々しく、あらためて阪神大震災のすごさや、街を直そうとする神戸の人達のすごさがわかったと思う。

またホテルへ行って、3日目のポートピアランド、震災学習に行く時寝こんでいた僕に友人の1人が「これ飲めよっ。」とジュースを持って来てくれたのがすごくうれしかった。僕は修学旅行に行っているんな事を学んだと思うし、帰って来てから学ぶ事もあると思う。

僕は3月のこの3日間を有効に使って行こうと思う。もし、今後も神戸やその他の所へ旅をしたりしたら、遊びもするけど、その土地の事についても、学んでいこうと思う。



ジェットコースターと私

C組 青山 紘子

修学旅行3日目。ポートピアランドに行った。バスの中から大きな観覧車が見えてきた。私の友達是比较的ジェットコースター類は平気な人達だった。回転のあるジェットコースターを見て、うれしそうにしゃべっていた。それにこのポートピアランドにはジェットコースターが3つもあった。ジェットコースターが苦手な私にはあまり楽しみには思えなかった。遊園地の入り口でフリーパス券をもらった。その後話を聞いて解散になった。

「最初、何処行く？」

「ジェットコースターに決まってるよ！」

私達は走って、そこに行った。私の友達はみんな楽しそうな顔をしていた。でも正直言ったら私は心の中で怖いよう、大丈夫かなあとか思っていた。列に並んでいるとジェットコースターが入って来た。“ガタン、ガタン”独特な音を立ててから列の前に止まった。早速乗り物に乗り込んだ。ひさの上まで安全バーを引いた。いざ出発！最初変なトンネルを通りぬけて、序々に上へ上へと昇っていく。(来るっ！)乗り物の高さが最高に達して一気に落ちた。一次も又ジェットコースターに乗る事になった。今度は最初にも出てきた回転の入ったものだった。前のジェットコースターと同じ様に乗り物に乗った。出発してすぐ大きな下りがある。乗り物はどんどん昇ってゆく。そして…「うわーっ！」



修学旅行の日

C組 片山 智子

修学旅行関係の仕事が始まって以来、私達実行委員12名は放課後残って活動を続けてきました。実働委員の手を借りても思い通りには進まず、何度も先生方に怒られてきました。そんな私達は“もう明日なの？”と驚きながらも修学旅行前日を向かえたのでした。

さて、私とはいうと、前日から熱を出してしまい、惜しくも修学旅行は休まねばなりませんでした。3月12日。学校から帰るとすぐ気持ちが悪くなり、熱が出ました。私が一番不安だったのは、“明日は休まなければいけないのか”ということでした。絶対休みたくない、風邪なんかすぐ治してやる。そんな気持ちでした。ところが熱は下がらず、苦しくなる一方でした。『今まで実行委員で頑張ってきたのに。みんなで楽しく過ごすはずだったのに！』そんな気持ちで一杯でした。翌日の3月13日。先生に『休む』ということ伝えるのはとてもつらかったです。たぶん、とても悲しかったんだと思います。涙がいつの間にかボロボロこぼれていました。その日はずっとベッドで寝ていましたが、目を覚ます度に右手のしおりをながめていました。元気になったその次の日も、またその次の日も。そうやって3日が過ぎるのを待っていました。

今ではみんなのおみやげ話を楽しく聞いています。とても楽しそうにしゃべっているのを見て“ああ、よかったんだな。”と思っています。この3日間、私なりに得るものがあったのかもしれない。



走りまくった修学旅行

C組 小西 真希

今回の修学旅行は、すごくいっぱい走っていた。まず1日目、それは大阪城に行くまでの間。時間がなかったの、とにかく走った。そして、私が思ったこと、もう走りたくない。と思ったのに、次の日は調査活動で私達の班は、神戸でボランティアをしたり、アンケートをしたりしていた。私は、時間もたっぷりあるし、昨日みたいに走ることはないだろうと思った。しかし…。私の予想は大きくくつがえされた。それはなぜか。三宮駅前でのアンケートに思いのほか時間がかかってしまった。そのおかげで、集合時間5分前になってしまった。そこで私達はタクシーをひろい、いそいで『かざみどりの館』の近くに行ってくれとたのんだ。しかし、そのタクシーの運転手は、なにを思ったか『かざみどりの館』をいきすぎて、私達をおろした。私達は、集合時間に間にあうと思った。だが、前の人に『かざみどりの館』の場所聞くと、ぜんぜん場所がちがいで、いそいで私達は坂を下り、そして長い長い坂を上っていった。が、私のかばんが走るのをじゃまして、うまく走れずそして、力を倍消耗してしまった。そして、ようやく坂を登りきると、そこにはみんながいた。私は、ハハハハいいながらみんなの列の中にくわわった。そして、この2日間で思ったこと、それは、普段から走っておくべきだと思い、そして最後にタクシーの運転手うらむぞ。



学んだこと

C組 山根 あさみ

最初は不満ばかりだった。一流ホテルなんかより、みんなでワイワイ騒げる小さなホテルの方がいい、とか。劇なんか見ないで、もっと遊べる所へ行けばいいのに、とか。だから、それほど楽しみにしていなかった。それなのに、こんなにも楽しんで、たくさんのことを学ぶことができて、本当に満足している。今回の修学旅行は私にとって最高だった。

私のいとこは神戸に住んでいるので長い休みになると、いっとこ2人で神戸の街を歩きまわった。いとこなら自分たちの行きたい場所へ好きなだけ行ける。だけど修学旅行は自分の好きなようにはできない。それがたまらなく嫌だった。もっと見たかったのに時間がないせいで見られなかったり。友達との意見がくい違ってしまった。そんな時、自分をおさえて人の意見を尊重することの大切さを知った。同時に自分には、その力が全然ないことにも気づいた。せっかくの修学旅行だから私は、とにかく楽しい修学旅行にしたかった。だから自分の意見ばかり言っていたような気がする。でも、本当に楽しい旅行にするには、時には自分をおさえて、人に合わせることも大切なんだと強く思った。今回私は友達にたくさん迷惑をかけてしまった。でも日常生活では分からない友達の大切さを知った。

今回私は人からたくさんのを学んだ。大きくまとめると、人の気持ちを考える、ということ。学んだことを生かしていきたい。